

位にも到るべく、高く佛果をも期すべきと云ふことじや」とは彼の實踐行履の處。

一。一言にして云へば彼は空言の人に非ずして眞摯實行の人なり。其師授をからずして蘇漫多(Subanta)底彦多(Tinganta)に通し梵文をよむこと翻經をよむ如く、『梵學津梁』を造れるが如きは餘技と云ふべきのみ。

(龍造)

一。今、月は既に西、孤嶺に落ち、微かに閃ける明星の餘光亦陰雲の蔽ふ所となり、世は永へに魍魎の横暴を逞くすべく黑暗々の天地たり。此間を右往左往に行き交ふ群衆、自ら欺き、他を害ふ。叫喚喧嘩、さながら是れ修羅場たり。而して此群衆の裡に介在して、萬綠叢中紅一點の偉聖あり。斯れは是れ、徳川幕末に出世し給へる、河内高貴寺の僧。慈

雲其人なり。

一。慈雲年二十一、慨然として嘆じて曰く「心尙し明かならずんば萬法徒設たらん、恰も是れ山なす黄金あるも其用を知らずんば瓦礫に同じきが如し、我れ「吾心」を明めずんばあるべからず」と。彼れは今、黒暗の巷衢に立ちて、先づ自己の眞意義の如何なるものなるかの疑問に逢着せり。二年の兀座と數旬の振錫との眞摯熱烈なる修養は、遂に釋然として疑問を氷解せしめたり。此に慈雲は群衆に先ちて光に接するを得たりき。

一。末法澆季濁亂の巷に立てる彼は、佛日を正法の古へに復さんとするの念切なりき。世の凡ては滔々として暗より暗に徨ひ、冥きより冥きに辿り、光明の大道は、澆季機拙の口實の下に隠没して命危きと懸糸の



如し。彼れ曰く、此道有て此天地あり、此天地ありて此人あり、古も溪山日月今も溪山日月、古も男女大小、今も亦男女大小、此人の人たる道は、佛在世にもあれ、佛滅後にもあれ、常に世間において衆生を利益す、人機衰へて道行はれずといふは非なり、持戒は末法世中の人の修すべきと甚だ難し、此一言を以て衆人の眼を瞎却し、引て黑暗路に入る」(「十善法語」と)。

一。慈雲の「正法律」が如何に弘まりしや、を問ふとをやめて、黑暗街に立てる先覺者としての彼が如何に氣高く、如何に嚴かに、如何に尊くおはすかを思へ。然して黑暗街頭の群衆中の自分が、如何に穢れ如何に力弱きかを思ひて、此に大なる靈光の自覺に一步を進めざるべからず。

(四成)

一。河内高貴寺の奥院、高祖弘法大師の祠堂に隣りて、靜に永劫の眠を取り給ふは。慈學行學共に其譽高き慈雲尊者にある也。

一。高祖大師の學識は高かりき、覺鑊上人の見解は深かりき。尊者の學識と見解、或は此等兩聖に優れざりしもの有りしと雖、其高潔なる實踐躬行の方面に於ては、蓋し兩聖の遠く及ばざりし所にして、又吾人尊敬する所たる也。

一。『梵學津梁』一千卷の編纂は、後人の偉業として稱讚する所たりと雖、吾人の偉として嘆美する所は其徳に在る也。堅固嚴肅なる小乘戒を任持して亂すこと無き、尊者の聖行より與へたる徳化を以て吾人は尊者の偉業として稱揚する也。

一。尊者は意志の人なりき、亦實行の人なりき。其宇宙間に於て心靈



の一法のみありて、貴ぶべき寶珠たる事を自覺するや、忽ち其寺を法弟に附して一室に兀坐し、心靈の修養に勤め、則ち寒暑を閲する二回、終に其戸牖を踰へざりき。尊者は一切を放棄して心靈を修養し、終に靈なる寶珠をして燦たる光明を輝かしめたりき。

一。鑑真和尚に依りて傳へられし戒風の湮滅せんとするや、大悲興正の二菩薩に依りて再興せられたりき。鎌倉時代に再興せられたる戒律の復び弊儀を雜ゆるに至るや、尊者に依りて三たび改革せられたるなり。尊者は實に日本戒律の改革者にてありき。

一。改革者由來破壞的にして猛烈なるも、尊者は温乎たること春光の如くなりき。即ち弟子親證の壯語を折制し誨へて曰く、「時未だ到らず、されば斯道に裨益なきのみならず、却て誹謗を來すべし」と。去れど靜

に僧制を作りて盛に正法律を鼓吹し、以て僧儀の惡風を矯正したりき。

一。尊者一生戒律を講じ、其晚年病軀を以て尙ほ說法懈らざりき。嘗て十善戒を講敷して『十善法語』十二卷を撰し、後毎に言て曰く、「我を知り我を罪するものは夫れ十善法語か」と、此一語に依りて、又其細心なる徳行知るべき也。

一。『成實論』に曰く、「佛法の貴きは如説に行ずるが故なり」と、尊者の尊敬歸依せらるゝもの、又其如説に給ひしに由る。吾人の尊者より學ぶべきは亦此一事あるのみ。(行坡)

一。末世人師の行狀を嫌惡すること恰も草裡の蛇蝎の如く、大聖在世の正法を欽仰することさながら天上の皓月の如く、其の言其の一生を擧げて釋尊の昔にかへれと唱え、精勵謹嚴己を持せしは、是れ我が慈雲尊者



者なりき。

一。吾は静温雅麗真に親むべき童顏鶴髮の翁、然も眉宇には涼乎として嚴めしく、牢乎として抜くべからざる氣魄宿せる尊者の像を見て、肚裡千菴の隠美萬重の至聖を想見せずんばあらず。

一。彼は古來靈界の諸聖に比し赫々の言行超邁の偉烈、人耳を驚倒して肅然畏敬せしむるもの少しと雖、垂髫より墳墓に至るまで終始一貫、忠實に奮勵して正醇ならんと期し、溷濁の渦中に介在して正法の清淨地に彼自らを建設せんと欲せし只其の一事、優に彼を俊抜して、泥土に困轉し、暗中に摸索する醜陋汚穢の肉團たる凡衆と甄別するに足る。

一。カーライル嘗てジョンソンを評して曰く、雄邁なる精神は忠實なる恭順を意味す、獨創の真髓は必ずしも新なるを要せず、彼は全く舊を

信じ、其の舊説の信すべく又た己に適するを見るや、彼は即ち其下に在りて堂々勇者の偉態を扮して、以て儼然として生活したりと。此の語や亦た我が慈雲尊者を讃する優乘絶妙の好辭たり。正法律の興隆十善の宜布、彼が一生の心血を瀝ぎしは、古色蒼然たる舊式のみ、吾人は博識透徹彼れが如くにして尙能く術學誇説の戲弄に陥られず、之に據つて立つを至榮至福となせし尊者の高偉を仰がずんばあらず。

一。文化元年十二月二十三日夜壽八十七、病をつとめて徒弟の爲に講説す、講なかばにして俄に弟子に命じ燈を増さしむ、弟子命の如くす、尊者尙暗きを云ひ更に燈を點加せよと告ぐ、弟子怪訝にたえず答ふるに燈火平常に倍するを以てす。尊者乃ち徐ろに卷を閉ちて曰く、然らば眼先つ休む五體之に次かんと、淨机を前方に排し結跏安祥燈の消ゆるが如



く俄に悲涙に咽ぶ徒弟を遺して逝きぬ。彼は八十七年の生涯迷衆の愚蒙を憐み諄々道を訓へて能く人生を體説し、去るに臨んで亦た能く昏昧の含識が最大難解の問題となす死を最も容易に色説せり。彼も亦た暗黒界裡の一光明濁世の一偉聖、此の如くして生れ、此の如くして在り、此の如くして逝きし彼の生涯や、豈に吾人をして謹然靜默肅察を價ひせずとせんや。(了整)

一。夫れ「法に貴ぶ所のものは心なり、心倘し明かならざれば萬法は徒説」ならんとは、これ我が慈雲尊者の向上心にして「胸中蕩然たり、萬象森羅、箇箇光耀、三世十方、了了無礙なり、猶ほ白雲空中に在て卷舒自在ながる如し」とは、これ正に其の圓熟自得の心境なりき。

一。誠に心靈の明了は、人生旨義の源泉なるかな。人間この靈心あり

一度び明法として萬象を照さんか、自然は決して外物ならず、人は永く他人たる能はざるなり。この心靈の感ずるところ、三界は我が有なり、有生は我と一體なり。この心靈の觸るゝところ、時空は其の限界を消失して、三世十方了了無礙なり。實に思へば樂しきことにあらずや。

一。心靈の感應あり、我れ何ぞ我の微少なるを傷まん。我を求むるに我なし、かくて我れは消え失せん計りの無限小なり。されど心靈の感應に助けられて、我れは又同時に無限大となりて表はる、妄想に蔽はれて自他の隔てを構へたるものも、一度びこの心靈の妙用に想ひ到れば、誰れか又「全く諸佛大悲攝化の中に在て進退する」を感せざらん、實に思へば歡ばしき事ならずや。

一。心靈の感應あり、我れ何ぞ其の孤獨を憂えん。凡べて形の世界に



於て時と所とに距てられたるもの、更に確實なる旨義を齎して、悉く心霊の國に會し來る、聖賢我が前にあり、親好の友傍らにあり。この間の妙趣を味ひ來れば、誠に千里萬里も可なり、眼々相對するも可なり、言詮喃喃々丁寧なるも可なり、黙して多劫を經るも可なり、唯だ知る人のみ有て知らん、實に思へば快きことにあらずや。

一。この深妙なる靈心の自得は即ち佛道の根據にして、やがて又た人道の指導を有するものなり。この心霊を自得するものは即ち天分の差なきを知る、故に順を樂しみ、變にありて變に安んず、從て彼れは盜ます偽らず怒らず悲しまず、十惡こゝに其の跡を絶つ。又この心霊の妙用を知るものは自己内に一切を見る、故に惡を惡まずしてこれを憫み、善を嫉まずしてこれを喜ぶ、從て彼れは人を敬し人を愛し、能く導き能く惠

ぐむ、十善こゝに盛なり。「謹慎篤實は實に歡樂の在るところ」、かくて佛道と人道とは元來無二なり、一舉して兩道を成す。「思へば面白きことにあらずや。」

一。かくて我が慈雲尊者は人道と佛道とを合一し、嚴格なる律に溢るゝが如き歡樂を融和せり、これ豈に修養の圓熟せる大人の境界にあらずや。尊者が「大人たる者は渾然として璞の未だ磨せざるが如く、淵の浪たゞざるが如く、此所道の存するところ」との言、吾れは直ちに以て尊者の徳を表せんかな。(天榮)

一。徳川時代の佛教は實に因循懦弱の風に掩れたりき、されど此時にあたり、河内葛城山下に一英靈底の偉僧は現はれたり。而して極端なる復古主義を標榜して、天下の衲僧をして震駭せしめたりき、我慈雲尊者



は即ち此れ也。

一。吾人は尊者が一代の行履を見て尤も感嘆に堪へざるは、其態度の勇猛と、其識見の卓抜なるにあり。然かも其精力の非凡なりしことは梵學律梁一千卷の編著に證して餘あるにあらずや。

一。尊者は天資頗る高邁なりき、されど其修養時季に當りて、能く苦修棟行せしとは、彼の濟門の英傑自隱に尤も相似たるものあり。尊者初め京師の儒伊藤長胤に經史を學び、又南都に遊んで顯密の教義を學びたりき。されど尤も記すべきは彼が證を信州の大梅禪師に求めたるにあり。

一。尊者一日慨然とし思へらく、法に貴ぶ所は心なり、心にして明ならざらんか、萬法徒設のみ、如何に顯密の教義を學得蘊畜すとも、何ぞ瓦礫に異ならんやと。茲に於て寺を出で諸縁を抛ちて室中兀座の人と

なり、以て心源を究明せんと企てたり。乃ち戸限を超へざるを二寒暑にして遂に護悟の門に入るを得るや、走りて大梅に見へ、其見解を呈し投機相契ひ、宛然重擔を釋くの感ありたりと云ふ。

一。尊者は又僧制の紊るゝを慨して、能く佛世の正規に則りて正法律なる僧規を作り。服制の濫るゝや、方服圓儀十卷を述べて、其が匡正を叫びたりき。以て其志の那邊にあるやを察するを得ん。

一。教界の刷新を期し、法勢を佛世の古に復せしめんとは、實に尊者の大志願なり。僧侶の腐敗を慨して其を根本的に廓清せんとは、實に尊者が世の希望たりしなり。

一。今や教界の濁濫日に甚だしく、復古主義の聲漸く興らんとする時吾人は第二の慈雲尊者の出世を切に期待するもの也。(了淨)



# 一、『御一代記聞書』

小 引

『御一代記聞書』は本願寺中興蓮如聖人(一五二一—一五九〇)の言行録なり物に觸れ時に應じて、門弟の書録せし聖人の教訓を、實悟尊者の合輯によりて成りたるものなり、総して三百十六箇條を攝む。

一。『蓮如上人御一代記聞書』は、あらゆる真宗聖典の中、否、寧ろ、あらゆる佛教聖典の中、一大特質を有す。何をや、曰く、只信仰の一途を以て、日常生活の問題を解決したること是なり。

一。佛教聖典は悉く信仰の書なり。されど、其多くは、讀者をして、日常生活を度外視し、若しくは、日常生活を打破せずんば、信仰的生活



に入るべからざるが如く、思惟せしむるの傾向あるを免れず。

一。眞宗聖典は、又、悉く信仰の書なり。されど、其多くは、讀者をして、信仰を以て、只死後樂園に入るの因となし、現世の問題の如きは、必ずしも信仰によりて、解決するを要せざるが如く若しくは、解決するの價値なきが如く、見做さしむるの傾向あるを免れず。

一。稱名は能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満て玉ふ。然り、信仰は、人生に關するあらゆる問題を根本的に解決すべき唯一の鍵なり。されば、其の未來問題を解決し、其の超世問題を解決する、元より其の權能の内にあり。然れども、同時に、又、現世に於ける日常生活の問題をも解決すべき力能を備へずんばならず。

一。『御一代記聞書』にあらはれたる蓮如上人、及び其門弟諸子の言行

は、主として、日常の平民的生活の問題を、信仰によりて解決したる實跡に外ならざるなり。

一。蓮如上人仰せられ候、當流には、總別、世間機わろし、佛法のうへより、何事もあひはたらくべきとなるよし仰せられ候。世間機をすて、佛法の上より、何事も相働くべし。是れ、此書一部に貫通せる大精神にあらずや。

一。吾等此世に生まるゝや、或る力量を有す。力量を有するは働かぬが爲なり。然れば、吾人は何を働くべきか、又、如何に働くべきか。

一。學問といひ、勞働といひ、事業といひ、職務といひ、凡て、我幸福の爲、我利益の爲、我權勢の爲、我名譽の爲の犠牲たらしめんとし、二六時中、我を中心として活動す、是れ滔々たる世間機の眞相なり。



一。佛法には無我と仰せられ候、われと思ふことはいさゝかもあるまじきことなり。世間機を排斥するに「わろし」の一言を以てし、一切の活動を無私の信念の上に律せしめんとす。是れ豈に、自力世界に對する大革命の聲にあらずや。

一。吾等は、此偉大なる革命の書が、久しく、世界の人類に忘却せられたるを憾むとともに、今後此書の眞精神を發揚することによりて、惡魔の世界を撲滅するの期あらんことを望むや切なり。(證信)

一。吾人は曾て『御一代聞書』に對して。單に研究的態度を以て讀み徒らに豫想的信仰の見地にありて批評したりき。今に於て誠に懺悔の念に堪えず。一度靈覺に催されて熟讀玩味すれば其内容の豊富にして文義の明確なる誠に驚く可きものあり。其實験的行爲は自己の行爲を反省せし

めて、言々句々切々として我が胸臆を打つ。まことに自己が曾て感想して而も云ふ能はざる所を此靈語を通じて遺憾なく發表する心地す、かくて吾人は他に比して此聖教を愛讀措く能はざるなり。

一。一度絶對の警覺によりて靈の大道を進みながらも、由なき名利に誘はれて、やゝもすれば我執の小路に出でんとす。かくて吾人は信後の修養、報謝の不行と云へる事に深き意義を認めずんばあらず。『御一代聞書』の「我心にまかせずして、心をせめよ」と云へるも實に適切なる教訓にあらずや。

一。人は其性格に隨ひて其嗜好と希望を異にす、かくて各其志す所に進む、自己の發展と云ひ靈的奮闘と云ふ、一見立派なる如くなれど而も其實、一種の我執に過ぎざるのみ。逆師の「總別人にはをとるまじきと



思ふ心あり、此心にて世間には物をしならうなり」と云へるもの、絶對他方の見地にありて、自力界を喝破せし一大警告にあらずや。

一。汪洋として漲り來る大洪水は遂に其提防を破壊せずんば止まず。切々刻々募直に進む求道心の熱血は燃えに燃えて、遂には自己を否定し我執の増長を拒絶す。かくて絶對の信念は溢れ出でん。「佛法は無我にて候上は人にまけて信をとるべきなり」の言、まことに適切なるを覺ゆ。

一。吾人は世の煩悶懊惱する人に對して同情の念なき能はず。報謝の不行は利他事業として益々其必要を認め、信後の修養は奮勵すべきものなるを思ふ。され、昔は修養と云へば如何にも苦しき事とのみ思ひしが、一度靈の大道に入れば、修養てふ事に、無上の慰安と、限りなき希

望の滿ち滿つるを知る。「御一代聞書」の「佛法は心のつまるものと思へば信心に御慰み候」の語、云ふべからざる妙味を感ず。

一。絶對的確信によりて今の所謂倫理道德を批評すれば、彼等は何等の價值も有せず。善と云ひ惡と云ひ、目的と云ひ幸福と云ふ、唯是一片の學說のみ。思へ、吾人は事實として善惡の標準や幸福說によりて、絶對的安住を得ざるにあらずや。「嘆異鈔」は所謂倫理の善惡を斷乎として否定せり。「御一代聞書」は更に歩を進めて、信仰の上に立ち我執の有無によりて善惡の念を拒否す。「よきことをしたるが惡きことあり、わろき事をしたるかよき事あり。よき事をして、われは法儀に付てよきことをしたると思ひ、われと云ふことあればわろきなり。わろき事をして、心中をひるかへし本願に歸すれば、わろきことをしたるがよき道理にな



る由仰せられ候。されば逆如上人はまいらせ心がわろきと仰せらるゝと云々」まいらせ心は我執なり自力なり、吾人は道を修むる上に警覺する所なかるべからず。

一。孤立寂莫の感は何れより來るや、苦痛煩悶の源は何れより起るや、吾人は是れを自力我執の上に認む。さあれ、一度自力無功を自覺せんか、孤立の感は忽ちにして調知温暖の感となり、寂寞の感は一變して恩寵の感となる。確信の前後其の心狀に一大異變ある、實に驚く可きものあり。一度信仰の門に入りて事々物々を見んか、宇宙は自己の爲めに造られ、萬有は自己を包容す、我れはまことに慈光の懷中に安住する心地す。「南無阿彌陀佛に身をまるめられる」の眞意、まことに深い哉。

一。吾人が日常の起居動作皆之れ利他の大作と思へば懺悔の念、感謝の情、まことに堪え難き心地す。『御一代聞書』を拜讀するもの、誰れか蓮師の庵衣庵食にして辛苦奮勵し給へるに感激せざるものぞ。

一。吾人は聖典を玩味し來る時、偉大なる教訓を受くると共に、深き懺悔に堪へざるなり。(現慶)

一。開卷忽ち、沛然として菅雨に浴するを覺ゆ、自力念佛他方念佛の文字、即ち是れ。

一。吾人は此金玉の文字が、幾多の僧侶と信徒の常套語として繰返へさるゝを知る、而かも其眞生命を抹殺しつゝあるを見て、悵然たるを禁する能はず。

一。自力の念佛とは何ぞや、我の世界なり、矛盾と迷執とより組織せ



る。妄悪醜の世界なり。他力の念佛とは何ぞや。無我の世界なり。調和と純愛とより結晶せる、真善美の世界なり。彼は火宅此は樂園、彼や厭離すべく、此れや欣求すべし。

一。我の世界は憎の世界なり、煩苦の世界なり。名を求むる者、利に奔する者、車に乗る人、車を曳く人、泣く者、笑ふもの、營々として生き、蠢々として動き、阿鼻焦熱の裡に兒戯を恣にす。憐むべきかな。

一。「佛法は無我にて候」の警鐘は、「もろくの雑行雑修自力のこころをふりすて、一心に後生たすけたまへと、彌陀をたのめ」と、蓮師の人格と著書とを透して、嗚り渡れり。

一。彼等は醒めぬ、鐘聲はまた、開に入り、彼等は再び昏睡して、現代の我慢世界とはなりぬ。昨今の時、無我の警鐘を亂打するもの、夫れ

誰の任ぞや。(幽玄)

一。「賊縛の比丘は王遊に草繫を脱し、乞食の沙門は鵝珠を死後にあらはす」行春の愁ひ永く、茫々たる去往に思ひを回らす時、一たび聖人と颯々たる緑陰に語らへば、未だ曾て烟霞淡蕩の間、舷を叩いて清爽なる春光に浴するの感なくんばあらず。

一。人のわるき事は能々見ゆるものなり「行さきむかひばかり見て、足もとを見ねば踏かふるべきなり。人の上ばかり見て、わが身の上のことなしたしなまずば、一大事たるべし」苦悶を語るを誇りとし、道を語りて誇りとし、人の信仰を議りて誇りとし、人の缺點を見出して誇りとせらる、罪深き狐の子なる吾れは、幾たびか筆を投じて泣きぬ。さあれ「かろく」ならず、「物を申さぬ」と定めし身は、再び慈靈照覽の下に吾が靈



感を述ぶべく勇みぬ。

一。自から智者なりと誇りしパリサイサドカイの徒が、神の恩恵より漏れける如く、「わればかり思ひ獨覺心なる」吾等、「同行善知識に親近せざる雜修」の吾等、罪福を信じて善本を修する偽信の吾等、「一人居て喜ぶ」ことを忘れて懈慢に墮れる吾等は、とわに御佛の恩光に浴するの榮を得る能はざりしなり。

一。敬●虔●は●罪●惡●の●自●覺●よ●り●起●り●、●確●信●は●自●覺●の●極●點●に●於●て●耀●く●摩●尼●寶●珠●な●り●。●善●き●樹●に●善●き●實●を●結●び●惡●き●樹●に●惡●き●實●を●結●ぶ●こ●と●は●何●人●も●信●ず●る●處●な●り●。●さ●れ●ど●善●き●實●の●惡●し●き●樹●に●結●ば●る●と●聞●か●ば●、●誰●れ●か●己●れ●が●耳●を●叩●い●て●疑●は●ざ●る●も●の●あ●ら●ん●や●。

一。我と我所とが苦の源となれることは千古不滅の眞理なり。されど

誰れか我と我所とが樂の源となるべきことを豫想し得るものぞ。吾等罪と知りつゝも罪を行ひ、行ひては苦しみ、苦しみては迷ふ、迷ひと知りつゝ、迷ひを捨つるの力なきものなり。現實は理想を追はで、理想は絶えず現實を追ひつゝあるものなり。誰れか善と知りて盜淫をなせる、誰れか惡と稱して人を愛せざる。何人も知る、知りて何人も行ふ能はざるなり。誰れかベストに惱めるものを抱き、身を蚊蠅の甜むるに任せて博愛を體現せる。

一。愛すると云ふ、自己に都合よき範圍に於て愛するにてある也、利他と云ふ自己に都合よき程度に於て行ふ也。嗚呼偽善の身、虛妄の心、醜惡を去りて吾れなく、吾れ繫縛を離るれば空なり、吾れの肉は繫縛なり、吾れの世は魔境なり。若し吾れ結ぶべくんば惡しき實のみ、破滅のみ、



死のみ、地獄のみ、悲哀の極みのみ。

一。救ひこゝに開かれ、光こゝに顯はる。善惡を超へ、因果を超へ、自然を超へ、天則を超へ、凡てを超越せる絶對無碍の道光、炳然として吾等が前に顯はれたまふ。本願に歸するはわろき事をしたるがよき道理になる。我と我所とは樂の泉となり。繫縛、苦痛、醜惡はかくて安樂の源となれるにてありき。惡人正機の本願は絶對的矛盾なり、撞着なり、沒道理なり、而かも絶對的圓滿なり、無碍なり、自在なり、確信中の確信なり、唯一無二の信仰なり、絶對の安慰一に此處に顯はる。聖人の信仰、於是乎千載の燈炬たるに値す。

一。「衣裳等にいたるまでわが物」にあらで「悉く聖人の御用物」なり。吾れに一物もなし、吾れ誇るべき何物をも有せず、若し吾れに誇るべき

ものありとせば開愚のみ、磨弱のみ、罪惡のみ、善なく美なく眞なし、世若し恐るべき醜惡なるものありとすればそは我が心是れ也、とや思しけむ上人の前には、惡人に接して同情の血涙となり、愚人に觸れては哀愍の熱情となる。人惡をなすは至常なり、責むべきものに非ず。詐偽、姦淫、盜殺は當然なり、已を得ざればなり、罵るべきことに非ず。げに使徒ヨハネが「主よ我れなるか」と叫べる如く、我れ諸の不善を具せり。されば同情を以て彼等に向ふべくして、吾れに彼等を議するの權威なし、彼等と抱合して行き、行きて大悲の寶國に永樂を享けむにあるのみ。一人々々のしのぎ」を慇懃に訓へたまひし上人の聲咳に接し來る時、吾等も亦歡喜新たに充ち、涕仰膽に泌銘するの思ひなくんばあらず。

一。わが前にて申すにくまばかげになりともわがわるき事を申され



よ。人若し我れを誹らばそは誠にして正しきなり。人若し我れを讃へなば、そを受くべき力吾れに在らず、我れなせるに非ず、佛我れに來りて爲さしめたまへばなり。心得たりと思ふは心得ぬなり。吾れに誇るべき主義なく、確信なく、眞實信なく、利地回向なし。死は凡て吾れの有なり、生は凡て汝のものなり、醜は凡て吾が有なり、美は凡て汝が賜なり。空は吾れなり、有は汝なり。吾れ生けるに非ず、汝來りて吾れに生きたまへばなり。

一、慈善の佛地に立ちて、絶對的沒我の境に達し、深刻なる懺悔と感謝によりて世を送りたまへる上人は、斯くて何物にも誇りたまわざりき。「下る程人は見上ぐる藤の花」上人が懺悔と謙遜は偶以て上人が偉大なる勇猛心の生ずる處、上人が聖人として偉なる點、實に茲に在りて存す。

げに他方信の偉大なる、自力作善の羈絆を脱して、絶對的自由と満足に充たさるゝこと、たとへば赫爍たる蒸炎を免がれて、琅玕の清影、涼風に乘じて輕舸を走らすの感なくんばあらず。

一。如何にして慈悲に逢べきかは、「凡夫往生の鏡」として崇仰されし『御文』によりて明にせられ、如何にして、道を修め行く可きかは、實悟尊老の輯『御一代聞書』全幅に活躍せる上人の溫容、自ら説示して餘りありとす。「此事を教ふる人は阿彌陀如來にて候」慈光は化現して上人に顯はれ、燒ども失せぬ重寶は、上人の威靈と俱に遂に亡びす。冀くは佛隨、矜哀の下、兄弟の苦惱を免かれしめよ、同胞の上に榮ある生活を齎らさしめよ。(論選)



## 二、『莊子』

小引

古來偉人傑士と呼ばるゝの人にして事蹟の燿滅して多く傳はらざるもの少しとせず。我莊子の如きも蓋し其の一なり。吾人は唯一篇の史記を彼が遺著に放出せる二三の逸話により僅に其の變貌を窺ふの止むを得ざるを憾とす。彼名は周西紀前約三五〇年今の河南省歸府魯陽の黎に生る、長して梁の漆園の吏たり性卓犖不羈にして尋常規矩を悦ばず百家の學問はさるものなかりしも而も黄老虚静恬淡の言を好み後終に一家言をなし支那思想界の一隅に燦爛し孔孟揚墨の徒と對峙して旗幟精明金鼓一振凍々乎として社會の耳目を聳動せり。楚の威王彼の賢を聞き使をして幣を厚ふして之を迎へしめ許すに相となすを以てせしに、彼笑て楚の使者に謂て曰く千金は重利卿相は尊位なり予獨り郊祭の犢牛を見ずや養食せらるゝ數歳文繡を衣せられて以て太廟に入る、此時に當りて狐豚たらんと欲するも豈に得べけんや、予豈に去れ我を汚すなかれ、我は寧ろ汚穢の中に遊戯して自ら快ふし困あるものゝ羈する所とせざるなく終身使へず以て我志を快ふせん又以て放縱の氣宇歴々として想見すべきにあらずや遺著莊子三十三篇後人の偽作挿入せるもの少しとせず、去れど古來彼が眞摯として何人も異論

なき内篇七篇のみに就て見るも思想理路の深玄精確なる鍊文遺筆の獨闢奇峭逸氣縱橫なる驚嘆賞覺えず快き呼び愉と喚はしむるものあり彼嘗て齊物篇中言へるあり萬世之後而一遇大聖知其解者是且暮遇之也と吾人はカーライルが然り永劫の終り迄嘆たんば我の存念なりと云へるを連想し偉人が當時に容れられず而も泰然として知己を後世に待つ所の雅量を仰かすんばあらず、彼何の時終りしかを知らず、唐玄宗天寶元年詔して莊子を封じて南華真人とす、彼地下にありて甘受せしや否や。

一。周末戰國の時、世は擾亂を重ね、人は飯趣を失ひて、孔孟の道德又奈何ともすべからざるに當り、獨り大道に安んじて苦樂生死を超脱せるものあり、莊子即ち之れなり。されば吾人今莊子の跡を尋ねんとするもの、豈に安心修養に資する所なからんや。

一。死生命あり苦樂天にあり、貧富貴賤、生死壽夭の畢竟免るべからざること、猶ほ日月晝夜、春秋四時の定まれる數あるが如し。然るに世の賢愚擧げてこれを知らず、終身役々として是非得失の間に往來して解

莊子

二二三



脱を求めず、一に何ぞ惑へるの甚しきや。

一。こゝに眞人あり、彼れ獨り能く天命を知悉し大道に依憑す、彼れは常に、自己の中に自己を認めずして唯だ大道の中に自己を見る。彼れの生くるや大道と共に生くるなり、彼の死するや大道と共に死するなり、彼れの窮するや大道と共に窮するなり、彼れの達するや大道と共に達するなり。然るに大道は本來死生窮達なし、故に彼れは能く死生窮達の間において、死生窮達を忘る。かくて悠悠自適、苦樂榮辱の間に往來すること、猶ほ無何有の郷に遊ぶが如し。是非得失何ぞこの中に存せん、これ豈に知の至りにあらずや。

一。然るに世の賢人學者は曰く、人事を盡して天命を待つべし、天命は平分なり奈何ともすべからず、人事は自在なり、こゝに是非あり善惡

あり而して是非や善惡や判断の意識を要す、從て人間の行爲は凡べて自我を根底とす、自我の有爲的行爲これ實に人間の行爲なりと。こゝに於てか人事と天命とは截然として區別せられ、大道は長へに人間に拒斥せられ、道學盛んに倫理起ころ。かくて彼れの是とするところ我これを非とし、我れの是とするところ彼れこれを非とす。然かもこの是非や遂に誰れかこれを定めん、あゝ何ぞ大道に歸らざる。

一。大道は至らざる所なし、眞理何所にか隠れて存せざらんや、故に聖人は自に依らずして天に照す、眞人は己を空うして大道に依る。彼れの言ふや大道に依るなり、彼の爲すや大道に依るなり。從て彼れは始めより自ら言はざるなり、己れより爲さざるなり。夫れ己れより言ふものは辨ずと云へども盡くる所あり、己れより爲すものは勉むと雖ども究ま



る所あり。彼の不言之言無爲之爲に至りては大道と共に窮盡あることなし、これ即ち人を没して天を存するもの、徳にあらずや。

一。徳を大道に歸せずして己れに歸するものは、徳と雖へども窮まりあり。窮あるが故に不徳の萌芽を藏す。見よ多くの罪惡は徒らに自己の徳を見て、自己の無徳を見ざるより起るにあらずや。故に自力の徳は徳而無徳なり、之に反して徳を大道に歸するものは常に自己の無徳を知る、自己の無徳を知る故に常に大道の徳を須ゆ。故に大道の徳は無徳而徳なり、無徳之徳何ぞ極まりあらむや。

一。莊子の教ふる所如是、願みて思ふに吾人が日常の憂は、常に小我に拘泥して大道に歸らざるに起因するにあらずや、こゝに於てか莊子無用の言は實に無窮の用を有すと云ふべき也。(大榮)

一。楚の威王、莊周の賢を聞て使をして幣を厚ふして之を迎へしめ、許すに相となすを以てせしに、彼れ時に濮水に釣し竿を持して願みず、吾聞楚有神龜、死已三千歳矣。王巾笥而藏之廟堂之上、此龜者寧其の死爲留骨而貴乎、寧其生而曳尾於塗中乎と問ひ、楚王の使者寧生而曳尾塗中と答ふるや、彼直に語をかへし往矣吾將曳尾於塗中と云ひ、又た聘に應せざりし絶世の快男子。吾人は彼を想ふことに、樊縁游泳狗兒の如く、諛を呈して世を渡らんとするの下劣の徒を卑ますんばあらず。

一。彼將に死せんとせし時、弟子厚く葬らんとせしに、冷語一番、吾以天地爲棺槨、日月爲連璧、星辰爲珠璣、萬物爲齊送、吾葬具、豈不備耶何以加之と云ひ、弟子烏鳶の夫子を食はん事を恐ると云ふや、在上爲烏鳶食、在下爲螻蟻食、奔彼與、此何其偏也、以不平平其の平也



不平、以不徵<sub>レ</sub>徵<sub>二</sub>其徵<sub>一</sub>也不徵、明者唯爲<sub>レ</sub>之使<sub>レ</sub>神者徵<sub>レ</sub>之、夫明之不勝<sub>レ</sub>神也久矣、而愚者恃<sub>二</sub>其所見<sub>一</sub>於<sub>レ</sub>人、其効外也不亦悲乎と云へるが如き、苦樂生死を超越し塵環已外に悠遊せる悟達之士に非ずんば焉ぞ能く此の如きを得ん。

一。彼は人生を大覺して大夢なりとす、乃ち這般の消息を漏して曰く、夢<sub>二</sub>飲酒<sub>一</sub>者且而哭泣、夢<sub>二</sub>哭泣<sub>一</sub>者且而曰<sub>二</sub>獄<sub>一</sub>方其夢<sub>二</sub>也不知<sub>二</sub>其夢<sub>一</sub>也、夢之中又占<sub>二</sub>其夢<sub>一</sub>焉、覺而後知<sub>二</sub>其夢<sub>一</sub>也、且其有<sub>二</sub>大覺<sub>一</sub>而後知<sub>二</sub>此大夢<sub>一</sub>也、而愚者自以爲<sub>レ</sub>覺、竊々然知<sub>レ</sub>之君乎牧乎固哉兵也、與<sub>レ</sub>汝皆夢也、予謂汝夢亦夢也、……不知<sub>レ</sub>所以生<sub>一</sub>不知<sub>レ</sub>所以死<sub>一</sub>不知、孰先不知<sub>レ</sub>孰後、若化爲<sub>レ</sub>物以待<sub>二</sub>其所不知<sub>一</sub>之化已乎、且方將<sub>レ</sub>化惡知<sub>二</sub>不化<sub>一</sub>哉方將<sub>レ</sub>不化惡知<sub>二</sub>已化<sub>一</sub>哉、吾特與<sub>レ</sub>汝其夢未<sub>二</sub>始覺<sub>一</sub>者耶、理想に蔽はれて人生の實

義を忘るゝの嫌あるも營々乞々泥土に困轉し覺めず悟らず濁世に跼踏するもの何れぞや。(即成)

一。所謂周室の禮儀三百威儀三千てふ燦爛たる制度典章、頽廢して其の生命を失ひ、禮文の拘綴繁碎民を巧智に陥れ、一變して矯飾となり、再轉して混沌となり、三變して危殆となり、周室倒れ諸侯起り、攻伐紛争遡前空後の修羅を現し、名教は徒に私慾の利器となり、紛々擾々人は歸趣を失ひ世は長へに暗黒と化せし劣惡の時代に介在し、獨り虛靜恬淡寂寞無爲の證境に安住し、是非一齋生死一如の見地に立ち、掀雷抉電の筆、虎豹變現龍蛇出沒、奔々騰々として躍るが如く舞ふが如き峻峭の奇文により、時代を甦醒せしものは莊子なり。

一。カーライル曰く、「若夫れ信仰なる者にして一度不精確とならん



か、然らば則ち實行も亦不健不正となり、誤謬となり、禍亂となり、之が波及する所益劇甚を極むべし。事此に至るや余輩は革命の亂源の深く醸熟せるを見る、罪禍の次第に累積して全く支ふべからざるに至るや、遂に大に轟發して恰も爆裂彈に於けるが如く、轟然一掃せられざるべからず」と、吾は莊子の時代を考へ彼の文によりて彼を想ひ、皇天が此事業の爲に特に濁世に降せる一奇聖を觀せずんばあらず。

一。豪宕精鑿の辭、雄深痛快の言、巧に先聖後賢を翻弄し、冷刺諷騷、醜穢守尸の道德を嘲罵し、逸氣縱橫、筆端宛から火花を散らして、紙背眞に弊あるかと疑はしむるもの彼が遺著莊子の一部なり。彼が所謂絶聖棄知指斛折衡の語、乃至聖人覺覺爲仁踈踈爲義而天下始疑矣底の辭に接せば何人か啞然として其の不羈放縱に驚き跌宕矯激に呆然たらざらん。

去れど一度熟讀審思せば何ぞ計らん放恣の裏謀嚴輝き、諷諭環瑋の暗雲中至誠の紫電閃き、憤世慨邪の熱腸溢れ満口の毒焰となりしを諒するに足る。彼の眞意や片言隻句の鎖末、一段一章の措辭に求むべからず。只其が不言の大主張を默察して初めて窺識し得べきのみ、誰か云ふ百世の後人を動かし得るもの一片至誠を含まずと。

一。能く言ふも行ふ能はざるものあり、能く行ふも言ふ能はざるものあり、言ひ且行ふも極めて平凡なるものあり、能く言ひ能く行ふ尋常凡骨の輩いかでか企及するを得ん。况や天下の奇想を拉し來り而も練々として色顯體現毫も矛盾を見ざるが如き曠達妙悟の士に非すんば安ぞ能くせんや。吾は莊子の文を読み、奇奥の妙語を驚嘆し、而も其の字々句々生々の血管貫通して空文虚辨に非らざるを喜ぶ。



一。生を附贅懸疣と云ひ死を決疣潰癰と叫び、人生々を悦び死を惡むの迷情を憐み、富贍の妙喻を借りて、予惡乎知<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>生之非<sub>レ</sub>惑邪予惡知<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>死之非<sub>レ</sub>弱喪而不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>歸者、耶、麗之姬艾封人之子也、普國之始得<sub>レ</sub>之也涕泣沾襟、及<sub>レ</sub>其至<sub>レ</sub>於王所、與王同<sub>レ</sub>筐牀<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>芻養<sub>レ</sub>而後悔<sub>レ</sub>其泣<sub>レ</sub>也予惡乎知<sub>レ</sub>夫死者不<sub>レ</sub>悔<sub>レ</sub>其始之漸生乎と論せる彼は其妻死するも以て彼の心を動すに足らず、箕踞又た盆を鼓して歌ひ、死して哭せざる亦足れり矣。又た盆を鼓して歌ふ亦甚しからずやと責むるものあるや。優々として長嘯し人且假然寢<sub>レ</sub>巨室<sub>レ</sub>而我噉々然隨而哭<sub>レ</sub>之、自以爲不<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>命故止也と答へしが如き、元より人情に悖るの嫌ひあるも、又生死の外に超出せる達者の言として敬聽すべき者なきに非ず。

一。カーライル嘗て曰く我等は夢より成れる幻影の如し、而して我等

の短生涯は一睡を以て繚繞ると、莊子亦た人生を大觀して曰く夢之中又占<sub>レ</sub>其夢<sub>レ</sub>焉覺而後知<sub>レ</sub>其夢<sub>レ</sub>也且其有<sub>レ</sub>大覺<sub>レ</sub>而後知<sub>レ</sub>此大夢<sub>レ</sub>也而愚者自以爲<sub>レ</sub>覺竊々然知<sub>レ</sub>之君乎牧乎固哉兵也與<sub>レ</sub>汝皆夢也予謂汝夢亦夢也と、吾等蠢々戀々として穢土に固執し知らず覺らず現世を超越し能はざるもの、彼等の警語に猛省するの要なしとせんや。

一。荀子解蔽篇中彼を評して天に蔽はれて人を知らず、史記荀卿傳鄙儒莊周滑稽にし俗を知らず、宋の司馬光彼の文を評して君子の惡むべき者彼の辯は青蠅の黒白を變ずる者と酷評せり、偉人は不幸にして屢誤解せらる彼が齊物篇中萬世之後而一遇<sub>レ</sub>大聖<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其解者是且暮遇<sub>レ</sub>之也と胸中の機微を漏らせるが如き彼も亦た這箇の消息を豫想せしか。(了整)



## 三、『親鸞聖人御傳鈔』

小引

「親鸞聖人御傳鈔」は本願寺第三世覺如上人の編著に依りて成れる親鸞聖人御一代の略傳なり。覺師は龜山朝文永七庚午の年聖人の入寂を隔つる僅かに九年にして洛城に生る、正應三年三月帝都を旅立ち、如信上人に従ひて阪東八個國、奥州羽州の障地を歴遊し、普く宗祖の遺蹟を拜し而授の徒弟を限なく訪れて在世の古を偲び、同五年二月行を卒へて歸洛し、正和元年四十三歳にして再び奥州大綱に赴き、元弘二年六十三歳三度び同地に赴きて、行く／＼芳蹟を慕ひ給へり云ふ。而して御傳鈔の撰述は永仁三年十月中旬の頃、知恩報徳の爲にとて聖人御一代の事跡を集録し、上下二卷十五段となして后昆に傳へ、尙ほ康樂寺法眼淨賢をして其縁起を副書せしむと云。之れ實に覺師二十六歳東旅の初行を了へ給ひし後にして聖人の滅後正に三拾四年なり。

一。宗教的偉人を觀察するに大凡二方面あるが如し。一は批評的に其人物の生涯を記述するものにして、他は全然信仰的眼光を以て直ちに偉

人の胸中に潜める確信を剔出して、彼が生涯の根底を説明するにあり。

我親鸞聖人の傳記を作りませし覺師は後者に依り玉ひぬ。

一。本鈔一部何ぞ奇々怪々の事實に富めるや。之を信仰なき者の見地より批評的に見れば、荒誕不稽單に愚夫愚婦を喜ばしむるに過ぎざるが如しと雖も、一度眼光を轉じて信仰的に味ひ來る時は、我聖人一代の生涯、歴然として吾人の面前に顯現したまふを覺ゆ。然り眞の傳記は活ける偉人其物なり。批評的の傳記は偉人の形骸を描くに過ぎず。吾人は本鈔を讀んで親しく宗祖聖人に接するの感あるごとくもに、こゝに謹んで覺師の恩恵に謝するを禁せざるなり。

一。孔子は三十而立と言ひき、我聖人廿九歳にして信念の確立を求むるの急なる殆んど絶頂に達しぬ。九歳にして「鬢髮を削除し給」ひし我



範宴少納言の公は、「南岳天臺の玄風」も「四教圓融の義」も心靈の満足を得しめ難く、定水凝らし難くして識浪騒ぎ、心月觀するに由なくして妄雲頻りに胸中に荒れ狂ふ。吁此の煩悶を如何せんや。遂に「建仁第一の曆春のころ、隱遁のころざしにひかされて源空聖人の吉水の禪坊に尋ねまゐり給」ひぬ。

一。余高僧和讃を拜讀して其源空讃に至るに及び、未だ嘗て卷を蔽ふて感泣せずんばあらず。「曠劫多生のあひだにも出離の強縁しらざりき、本師源空いままさずば、このたび空しく過なまし」これや我聖人の中心より入りし感謝歡喜の念、嗚呼本師源空在さずば、無常と罪惡と無力とに泣ける煩悶苦惱いかにして去るべきや。「されば真宗紹隆の大祖聖人ことに宗の淵源をつくし、教の理致をきはめて「易行の大道を述べ給ひたれば

こそ、我聖人は「たちごころに他力攝生の趣旨を受得し、飽くまで凡夫直人の眞心を決定しましたませし」なれ。

一。平安佛教の餘光幽かにして、淨土教興隆の氣運吉水の禪房に溢れ、「貴賤轡をめぐらし、門前市」をなせし空聖人の門下、「常隨昵近の緇徒の數あり、都て三百八十餘人」と注せしも、眞に絶對的他力の大道に安立せし人や幾人、かの信不退、行不退の座に於て、前者の座につきし輩、我聖人を初めとして僅かに數人に過ぎず。他は皆な「自力の迷心に拘りて金剛の眞信に昏きがいたすところ」唯夫れ一切を如來に任せよ、一念の信は永劫の救濟なりてふ福音は、是れ實に我聖人が恩師空聖人の面前、雲の如き大衆に對して宣説し玉ひしものにあらずや。

一。如來回向の信心は、萬人に亘つて同一なり。この意味に於て御同



行と云ひ宗教的同朋と稱す。而も自力に執する輩は、我力を以て其信念を加へんとするを以て、他力の信念亦各自不同と思へり、慙むべき哉。

一。これに關して我聖人吉水の禪房に於て同學に對して「聖人(源空)の信心と善信(我聖人)が信心といさゝかもかはるところあるべからず、たゞ一也」と宣給ひしに衆慍つて其潜越の罪を鳴せしに空聖人宣給はく「信心のかはると申すは自力の信にとりての事也、すなはち智慧各別なるが故に信又各別なり、他力の信心は善惡の凡夫ともに佛のかたより給はる信心なれば、源空が信心も善信房の信心もかはるべからず、たゞ一也、我かしこくて信するにあらず、信心のかはりあふておはしまさん人々は、わがまいらん淨土へはよもまいりたまはじ」と。

一。南都北嶺の迫害に遭ふて、我聖人は恩師と訣れまつり、却つて

「邊鄙の群類を化」するを得るを以て、「師教の恩致なり」と喜びつ、北は雪深き越路より東關東に教化を施し玉ひ、遂に長安洛陽の故郷に皈り給ふ。此間大凡二十八ヶ年。小慈小悲もなき我名を、殿上公卿の間に揚げんより、やるせなき御親の御名を、遍く漁夫樵翁に傳へんとの大事業一先づ了へて故郷の天地に接し給ひし我聖人、其當時の感慨は如何なりしぞ。

一。本鈔這般の消息を傳へて曰ふ「聖人故郷に皈て往時を思ふに年々歳々夢の如し幻のごとし、長安洛陽の栖もあををどむるに嫩しとて、扶風馮翊ごころごころに移住したまひき」。

一。あはれ、何等縹渺たる神韵の響をのする妙文ぞ。想ふに我聖人、靜かに首を回らして往時を思へば誠に夢の如く幻の如くなる哉、嘗て吉



水の禪房、恩師の膝下に侍りしは早や既に二十餘年の昔となれり、紫峯烟霞の明媚なる山水は往時に變らねど、我心靈の救護者なる一代の恩師は、今や淨土に還飯し給ひて、我はいつしか霜白を戴くの身となりぬ。さあれ、如來の威神力に乗托して、親鸞の力の限りは御名の宣傳に努めんかな。今や長安洛陽のなつかしき故郷に飯りぬれど、我生涯は如來の御名を弘むるにありて、強ちに居住を定むるの要を見ず。唯夫れ如來の指導に任せて、扶風馮翊どころくに移住して大慈の誓願を宣傳せん哉。

一。嗚呼何ぞ其襟懷の光風霽月なる、我筆を取つてこゝに及び、思はず感謝の情に咽ぶ。(智學)

一。「御傳鈔」上下二卷、余は未だ斯くの如く簡短にして、斯くの如く

要領を得たる傳記を見たることなし。いかにも是れを我聖人の外部的傳記として見る時そこに幾多の缺點はあるべし。されど是れを我聖人の内部的傳記として見よ。茲に躍如たる我聖人の面影を拜する事を得る也。

一。幼にして榮譽ある權門を逃れ、長じて比叡の翠巒にかくれ、夫れより以來廣く三觀佛乘の理を究め、深く四教圓融の義を明め給へども、要は井が凡夫出離の要路に非ざることを知り、去りて六角堂の祈願、百日の密行を務め、終に御年二十九歳、「隱道の志にひかれて、源空上人の吉水の禪房に尋ね参り給ひ」たる、我聖人の前半生を見て、余は茲に我聖人の峻烈なる求道相を見る也。

一。栢つるぎの戦亂時代に於て、寒くわびしき源平時代に於て、人の世に聖は消えず。吉水禪房の信行兩座こそ尊ぶとがらすや。見よ。此時



行 音 の 人 偉

法然聖人の門下多くの殊勝なる淨業者は、此集會に來れり、されど、眞實に我聖人の如く、決然信不退の座に列り給へる人は少い哉。茲に數百人の門徒群居すると雖、更に一言を述ぶる人なし、これ恐らくは自力の迷心に拘て、金剛の眞信に昏きか致す所」ならずや。余は茲に我聖人の半乎たる信念を見る也。

一。古來苛刻なる迫害と罵倒とに拮抗し、信仰によりて動き、主義によりて進みたる偉人はありき。されど、我聖人の如く、其の迫害と罵倒が如來の善巧方便なるを認め、悠悠琴を弾じて世を救ひたる底の偉人に至りては少い哉。曰く、「我大師聖人源空若し流刑に處せられ給はずば、我亦配所に赴かんや、若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん、是れ尙師教恩致也」と。余は茲に我聖人の崇巖たる尊顔を

行 音 の 人 偉

拜する也。

一。遙に筑波の雙尖を望み、近く板敷の深山につゞく稻田の里、正に消へなんとする夕日のさし入る禪室の内、我聖人と辨圓が最初の一瞥は、いかに意味深長なることよ。嘗てイスカリオテのユダは、遂に基督を賣りたりき。今修驗者の辨圓は、忽に我聖人の弟子となれる也。余は茲に聖人の柔輓なる温容を仰ぎ見る也。

一。悲滄沈痛、万古無限の憂愁に沈む悶の子よ、來りて此書に依て我聖人の面影を拜し、荒涼たる汝の胸に清麗なる不斷の曲を彈ですや。

(廣度)

一。季正に秋なり、月夜の野を思へ、澄める月の冴え渡れる、かはゆき虫の妙なる曲を奏つる、木犀の香の何處より 流れ來れる、白露の清



らなる玉貫きたる、げに美はしき自然の園に、吾等はつゝまれて樂しき夢路を辿りつゝあり。されとタイムは、警覺の鐘を鳴らしつゝ、蕭々として吾れに迫り、茫々として吾れを去りつゝあると知らずや。覺めよ、冷氣既に肌に寒うして、森嚴の氣今や正に満てり。

一、秋は警覺の季なり、人をして最も眞摯ならしむる時なり。細り行く虫の音、渡り行く雁の聲にも心を止めて、物の哀れを知る最も切なる時なり。御傳鈔上下二卷は、正しく此季に於て、我れに彈づる天來の妙琴にぞある。

一、天來の妙琴、吁、何ぞ天來の神韵を發することの甚しきや、琴線僅かに十五に過ぎずと雖、弦端響くところ遠く七百年の聖容を呼び來り、溫顔躍如として吾等の前に顯はれ、無限の慈愍を默示したふ。一閃の聖

火はどほに靈臺に燃え來りて、我等が靈臺に光りを傳ふ。常住の響きを經とし、永劫の靈火を緯として織り成せる聖人の御傳鈔を緝くもの、未だ卷を蔽ふて感泣を禁じ能はざるもの誠に故なしとせむや。

一、あきらかに無漏の慧澄をかゝげて、とをく濁世の迷闇をはらし、あまねく甘露の法雨をそゞぎて、はるかに枯渴の凡惑を、うるほさんが爲に降り給ひし聖人は、愚禿と自ら稱して輕誇せる群生を警覺し、絶對他力の本願を標榜して、「臨終引導生極樂」の妙化を顯して寶國に歸りたまふ。如來の權化としての聖人が一擧手一投足は、豈吾等の輕々に評價し過ぐべきものならんや。

一、其初、鎮和尚の禪室に來りて聚螢映雪の苦節を抜んで給ひしより、十乘三諦の月百界千如の花も、あはれ出要の料たるに足らず。定水凝ら



すに由なく、心月動じ易くして、御年二十九歳、「隠遁のころざしにひかされて」吉水の禪坊を尋ね給ひ、又「いさゝか不例の氣ましましてより、口に世事をまじへず、たゞ佛恩の深きことを述べ」て遂に念佛の息絶へ給ひし迄、何れが吾等が爲ならざる可きぞ。オ、化は七百年の星霜に消えやらで、中秋今宵の月明に乗り、遙かに來りて。自然の假相に常住の風光を止めたまふよ。

一。辨圓遠きに在らず、名利の刃を鍛へつゝある汝の胸奥に生きつゝあるに非ずや、平太郎死せるに非ず、慈光閃き渡る汝が胸中の刹那に、そが活ける信仰を語りつゝあるに非ずや。語りて激せるものは多し、黙して笑めるものは多からず、知れるものは多し、行ふものは多からず。汝の胸臆を叩いて、汝が弓箭に尋ねよ。汝が胸奥に藏せる汝の鏡刃は、

汝が再び仰視し能はざる迄に汝の偽善を嘲罵しつゝあるを認めん。

一。「親鸞にをきては、唯念佛して彌陀に助けられまいらすべしと、よきほどの仰せを蒙りて信する外に外の仔細なきなり」「信心のかはりあふておはしまさん人々は吾が參らん浄土へはよもまいりたまはじ、よくくゝころえらるべき事なり」絶大なる確信に伴なふ敬虔、謹厚なる聖人の襟度は偉大ならずや。徒らに奇解を衒ひ、異風を誇りて、世を欺かんとする偽善の徒、曲解の輩來りて一たび此高風に浴せずや。(智恵)

一。御傳鈔一部を通して、吾人の最も敬虔の感に打たれ渴仰禁じ能はざるものは、大法弘宣の上に於ける聖人の態度が如何にも慎重にして、傳法の精神の熱烈なりし事也。

一先づ御傳鈔上卷に於て、吾人は聖人の前半生が如何に煩悶懊惱の烈し



くして求道の念の熾盛なりしかに驚かずんばある可からず。夫れ聖人はやむごとなき家系に生れ玉ひ、顯職の門に保育せられ一生光榮ある運命を荷ふ可き人なりしも、内に萌す求道の念は善く電光朝露の淨華虛榮を抛げ棄て、慈鎮門下に入り黒衣の寒僧となり給ひぬ。是れ吾人の最も聖人を偉大として崇敬し渴仰を禁じ能はざるもの一也。

一。聖人叡山に苦學し玉ふこと幾星霜、大小聖典の蘊奥を極め給ひしは云はずもがな、幾多の學徳ある師友に遇ふて修養に心神を碎き玉ひしと雖も、未だ以て聖人をして湧躍歡喜の域に進ましむるものなかりき。聖人廿九歳六角堂の參籠、豈故なしとせざる也。時はこれ朔風磨を襲く極月、三里の山路を遠しとせず、風雪を犯して六角堂に祈願し玉ふ、其求道心の熱烈なる、蓋し吾人の夢想にだも及び難きところのものありし

ならん。然も歸りては血氣にはやる山僧輩の呪咀と迫害に遇ひ給ひしと雖も、能く其志願を貫徹し、遂に法然上人によりて他力易行の大道を自覺し、勇躍禁する能はず。あはれ濁世末代の人衆、顛倒の妄見に墮在して永遠に三塗に沈まんとするを救はでやと、紛骨碎身能く佛陀大悲の法雨を注ぎ、普く枯渴の衆生を救濟せんとし玉ふ聖人の前半生は、實にや煩惱より活き玉ひたる光明の歴史なりき。

一。更に下卷に於て、吾人は聖人が幾多の迫害と抗議に耐へ忍びて、末代の目足たる眞宗の教義を弘宣し給ひしことによりて、聖人が信仰の如何に確牢にして熱誠に充るかを驚嘆し、親鸞の勸むる所更に私なしとてふ、謙讓比ひなき聖人の溫言に接し來りて、恰も秋霜烈日の裡、春風駘蕩の和氣に満てる人格を、最も明確に聖人の上に於いて窺ひ知るを喜



ぶもの也。

一。英雄世と合はず、偉人は多く誤解さるゝものなり。實に聖人の機半世は迫害多き歴史なりき。されど迫害は偶、以て聖人の偉大を顯はすに過ぎざりしなり。聖人三十五歳越後に流され玉ひし時「我れ若し配所にをむかすんば、何によつてか邊鄙の群類を化せん、是れなほ師教の恩致なり」と宣ひしに至りては、吾人卷を蔽ふて聖人の厚德に感泣せずんばあらざる也。

一。世間幾多の宗師徒らに俗權にこびて、諸宗將さに形骸を抱きて化石し去らんとしつゝあるの時、聖人の粉骨碎身的傳道は、賤か山邊津々浦々にも限なく及ぼされぬ。聖人の教が基礎堅くして千載永く其光輝を増しつゝある、豈故なしとせんや。

一。身、貴族に生れて微賤に伍し、學一代を蔽ふて愚禿に歸る、徳於茲乎充ち、光於茲乎顯る。あはれ、聖人の威靈、とわに來りて、世と人との上に、聖人によりて永く光輝あらしめたまへ。(義亮)

一。行者宿報設女犯、我成玉女身被犯、一生之間能莊嚴、臨終引導生極樂」ヒマラヤの峯は巍然として雲表に聳ゆと雖、恒河の水は濛々として今も尙下界の閻浮提を潤して休まず。崇高なる人格は遠く三界を超越すと雖、慈悲の御胸には絶へず甘露を湛へて、渴けるもの來り、迷へるものに顯はれたまふ。

一。道を悟るは月を見たらんが如し。人格は紙背にのみ活けるものにあらず、古今に通じて東西に亘りて、行くところとして矜哀の微笑をたゝえたまはざるはなし。眼あるもの光りを得て勇み、眼なきもの疑ふて狂







とすれば、勢至の化身と観音の垂迹によりて確信を得たまへる聖人は、やがて敬虔なる徒弟に菩薩の化現となりて映らざらめや。

一。不可思議の夢想によりて、不可思議の佛に歸り、不可思議の力によりて、不可思議の信仰に入りたまひし聖人は、汲めども盡きざる六字の靈泉を、吾等に殘して不可思議の佛土に還りたまふ。げに生は聖人に於て榮ありしとともに、死は聖人に於て光榮あるものなりき。榮光に充てる信仰に入りて、榮光に充てる逆境に移り、至廣の草堂に臥して至幸の生涯を感泣し給ふ。誠に聖人の前には逆境と順境との別なく、嘲罵と崇敬の異りを見給はず。徹頭徹尾一貫して變化まします、逆縁も聖人に於ては喜びとなり、順縁も聖人の前には喜びとなる、喜びに於ては同一なり。自然の大道は誠によく聖人の人格に顯はれ、不可思議の利益は

最も克く聖人の上に活きたり。

一。世に若し常識を以て唯一の規矩となすべくんば、聖人の生涯の如く然かく非常識的のものは稀なるべし。人見ざる處のものを見、人喜ぶ處のものを悲しみ、人悲しむ處のものを喜び、人誇りとする處のものを耻ぢとし、人拾はんとするものを捨て、人厭へるものを好み、人怒るべきものを怒らず、人信せざるものを信じ給ふ。吾れ於茲乎偉大を聖人に認め、不可思議の力を聖人の全幅に於て確把す。

一。いとも清きは六字の水なり、いとも甘きは六字の泉なり、いとも尊きは六字の流れなり。瑠璃なす色はとわに變らず、滾々として湧き、湧きては流れ、流れ流れて、到る處潤はさるはなく、行く處として漑がざるはなし。誤りて惱めるもの、見て未だ味はざるもの、來りて此の



水を掬び、來りて此の靈に活きよ、聖人は此御名に生きませり、オ、過去幾億の佛も、未來幾千の菩薩も、此御名に住み、此御名より顯はれたまふ。凡ての恐れと惱みは、靈の血潮の溢れ出でつゝある六字の泉を掬ぶところに癒されん。聖人今現に此六字の御名に活きます如く、汝もまた此六字の御名によりて新たなる衣を着、新たなる人に活くるの光榮を得ん、吁、彌陀の名號を離れて何の證りかある。吁、彌陀の本願を離れて何の安慰かある。若し御名を離れて信仰ありと云はば、それは空華なり、假妄なり、雜毒なり、姦詐なり、僞信なり、惡魔の咀なり。古今に通徹し東西に瀰漫して、億千の群生此御名に來らずして、誰かよくまことの寶國に歸り得るものぞ。オ、尊き聖人の靈よ、願はくば聖人の崇高なる信仰を諷すべく、そは餘りに穢れたる筆を持ちて、聖人の偉大

を潰せし吾等の罪を赦させたまへ。(略)



## 四、「天路歷程」

小引

天路歷程(The Pilgrim's Progress)はジョン・バンヤンによりて書かれたる萬世不朽の書なり。バンヤンは、四歴千六百廿八年、英國に生る。父は貧しき一農夫にして、バンヤンも亦廿五歳、清教徒の洗禮を受くるに至る迄には、一介の「鱈かけ屋」に過ぎざりき。されど、一度、宣教師として聖壇に立つや、彼の熱烈なる信仰と其雄辨さは、忽ちにして幾多渴仰の信者を作りたりしか。千六百六十年、チャールズ二世の君主政治となるや、彼はサムセルの教壇より拉し去られてヘドフォールドの牢獄に禁囚の身となれり。爾後十二年の間に在る獄中生活は彼の心靈に偉大なる光輝を増さしめたり。「天路歷程」の前篇は實に獄中に於ける著作なり彼の放免せらるゝや、再び熱誠なる宣教師として英國の教界に獅子吼し千六百八十八年遂に天國に昇りぬ。「天路歷程」が彼の免囚後後篇を加へて出版せらるゝや、英國の士人は更なり、世界各國の國語に翻譯せられて、世界の修道者は、英國宗教的大詩人の感化に隨喜するに至れり。

一〇「The Pilgrim's Progress」一巻、これ皆て一親友と會讀せし書。

我此書に深き因縁あり深き興味あり。况や其信仰道程往々自己のそれと閃然相符合するあるを覺るをや。豈一辭なきを得んや。

一〇 Evangelist 手を舉げ遙に曠野のあなたを指し、 Christian に教へて云ふ、足下彼處に小門の立てるを見うるか。〇「否、我眼にては之を見ること叶ひ申さず」。E「然らば彼處にかすかなる光明の存するを認め得らるるならん」。〇「然り、漸く認め得らるる如く思ふ」。E「其光明をたよりとして一心正念に進まば、必ずや一の小門に到着せん其門を敲き之をおとなへば、まさしく足下の赴く處を教へんかな」と。微光！これ求道者の先づ始に際會する實驗に非るか。

一〇 Christian は、はからずも失望沼に墜ちて滿身泥にまみれ、やうやく救助に遇ひ、再び進行を續けつつある間に Worldly Wiseman に遇ひ



ぬ。彼は利巧ものなり、世渡りびとなり、談話中説て云ふ。W「凡そ神經過敏の人は、身分不相應のけだかき道理に心をよせ、頓に精神の錯亂せし例少なからず、足下の如きも有るか無きか定まらぬものを得んとて、身の前途の如何をも顧みず迷ひ出でたるこそあさましけれ」と、これ實利論者物質論者の宗教家理想家を嘲笑するの聲にあらざるか。黄金萬能の世、拜金全盛の今日、求道者たるものとりわけ Wordly Wiseman の誘惑に遭ふを覺悟せよ。

一。Christianは旅また旅をかさね、求道者の是非とも通過すべき小門を過ぎ Interpreterの家に到着しぬ。彼は Christianを歓迎して種々の珍奇のものを見せ、やがて其手をとりていと廣やかなる一室に導き入れぬ。其室には掃除と云ふことのなかりしにや、塵埃累々足の容るべくも

見えざりけり。Interpreter一僕に命して之を掃へと云ふ、僕、命のままに見えざりけり。掃除にとりかかりしかど、音に掃除の効の遂げざるのみに非ず、塵埃紛々すさまもなく飛び來り、雲の如く、霞の如く、Christianの鼻口を塞ぎ、哽殺さるることもやと思はる。此處に於て、Interpreterは一少女に水をそそげと命す。少女、命に應じて水をそそぐよと見へしが、さしもに繁かりし塵埃もいつしか消滅し去りて室内は清淨無垢となりて現れにき。C「こは如何なることにて候ぞ」I「室に漲れる塵埃は、これ我等が祖先よりうけ來りし罪惡と、及び我等が日夜造る所の罪惡なり。此の罪惡は法律の箒を以て掃ひのけんとすれば、唯に掃除し得能はざるのみならず、自己及周圍の人を苦しむるに過ぎず。然るに一度信仰の水を灑げば、いともかるやかに之を清め得るなり」と。嗚呼此一小話、我等の罪惡に對



して、法律道德と信仰の力の如何に區別せるかを示すものには非るか。

一。Christian は十字架を見て背にせる重荷の苦を脱しぬ。されど其行くさきは平安の旅には非ざりき。種々の誘惑は屢々來りて彼を迷はさんとせり、時々危嶮の地に陥りて困苦一方ならず。Humiliation Valley には、現世界肉慾界の魔王 Apollo は、彼を其領分に止めんとして、彼をかざりしかば、此處にはげしき悪闘を生じ、Christian は一時は其生命さへ危ふかりき。されど暫くにしてのがるるを得。彼また Giant Despair に擒はれし際の如き、四方闇黒、さくものこては嘲弄侮蔑の聲のみ一友と相いましめて僅に自殺を避け得しが如き何等の苦心ぞ。こはこれ悟後の修行、信後の修養の必要を示すものにはあらざるか。

一。"The Pilgrim's Progress" 此れ信仰の道程なり、之をよみに我身

に思ひあたるふしもあるべく、之をよみて遽に心づよさを加ふる人もやあらん。吾人は善導大師『散善義』の二河喩と此書を以て東西の二大光明なるを感謝する者なり。(龍造)

一。此書に云ふ所の天國とは即ち信仰の大天地にして、是れに入るべく著者が靈的奮闘に活ける發表は實に此『天路歷程』の一篇なれ。

一。沈淪ほろびに至る路は濁くその門は大なり……生いぢに至る路は窄く其門は小し。然り名と富と戀に通ずる浮世の坦々たる順路は、萬人期せずして容易く之に赴くと雖も、かの人性本然の要求に従ひ、先哲の指導の下に一度奮起して靈の天地に進まんとするや、百千の悪魔は姿を變へ手段を異にして、吾等が向上の大道を塞ぐを以て、其道狹隘危険となる。此に於てか奮闘あり、苦悶あり、和讃に曰く「假令大千世界に、みてらん火



をも過ぎゆきて、佛の御名を聞く人は、ながく不退にかなふなり」と。  
 嗚呼向上の一路は唯勇猛のみ、精進のみ。而して是に對して『天路歷程』  
 は吾人の精神生活の細微に及んで痛切懇篤に之を教ふ。

一。聞説く、本書の著者パンヤンの靈的苦悶は、實に激烈なるものにして、僅々一日の間にすら二十回以上の平和と苦悶の變化ありしと。即ち時には深刻なる苦悶頓に一掃せられて光風霽月の心狀表はれ來り、喜びの餘り殆んど失神するに至るかと思へば、又忽然として暗雲胸中の光を覆ひて、彼は再び驚怖と煩悶の虜となる。かくする事數回。終りに曰く「今は唯嵐の名残を止むるのみ、并は雷鳴已に過ぎ去りて、唯僅かに残れる雨滴の、時には余の上に落下するに過ぎざればなり」と。熱に惱める病人の一夜を叫喚痛苦の中に過ごして、曉漸く熱衰へて漸次に平安

になりゆく如き心的經過は、此一文によりて最も明かに了解せらるゝに  
 あらずや。かくて彼は最後に喜悅の情を以て云ひけらく「今余の鐵鎖は  
 實に余の足と離れたり。余は余の苦痛纏縛とより脱したり、余の誘惑は  
 遁れ去りぬ。かくて此時より夫の恐ろしき經文は余を苦しめざるやうに  
 なりぬ。余は神の恩と愛に向つて悦びつゝ平和に復返するを得たり。」

一。讀者よ試みに此の實驗の告白を讀んで『天路歷程』を見よ。泣く妻  
 絶る愛子を蹴つて向上の一路に直進し、或は強力渾猛なる惡魔と戦ひ、  
 或は鬼火陰々として、怪魔荒べる凄愴限りなき死蔭の谷を勇進し、又は虛  
 榮の市街に災厄に罹り、疑城の牢獄に幽閉せられて玉の緒も爲めに絶え  
 なんとする迫害と危難とに健闘せる、前篇の主人公は正しく著者其人に  
 あらずや。是れや正に壯嚴なる靈的奮闘の好模範。讀者にして若し心を



沈めて、此の血と涙とを以て書かれたる一篇を熟讀せられなば、必ずや一種云ふべからざる森嚴の靈氣は、凜然として讀者胸中の琴線に共鳴せん事、決して疑を容れざるなり。

一。善導大師の「二河白道の譬喩」が、其廻らは亦死せん、住まらば亦死せん、去かは亦死せん、一種として死を免れず」の最後の決心に於て、二尊の發遣と招喚を信じ、直ちに何等の顧慮もなく彼岸に直進せし獲信の相を教ふると共に。吾人の蹈みゆく信念の白道が、水火の間に細くかゝれるに於て、一面信後の後景を示して「信心守護の譬喩」と稱せらるゝ如く。此の『天路歷程』も亦他の一面に於て信念相續に關して教ふる所少しとせず。思へ吾人は今如來の御名の雨具着て、此の風雲多き塵の世を通して淨土の春に旅するものにあらずや。讀者よ、吾人を以て徒ら

に此の世を厭ふて死後の樂土を憧かるゝものとなす勿れ。嚴密なる意味に於て吾人究竟の理想界は絶對の樂土にあらずや。而して此點に關して本書は亦活ける例證を示して濫すなし。要するに『天路歷程』は其儘にして如上兩面の教訓を與ふるものなり。(習學)

一。ジョン・パンヤンの一生涯の上には、後の修道者の爲に説示したまへる大悲衿哀の舒事詩を拜し奉る。然して、尙も、熱烈なる求道家の內的自叙傳たる『天路歷程』の天來の妙音を聞くを得て、大悲攝取のいやが上にも深厚なるに感泣措く能はず。

一。放逸無慚の青年パンヤンは、一日、野に出で、惡戯に餘念なかりき。時に空中に聲あり。爾は罪惡をすて、我手に來れ、然らずは、罪惡を負ふて地獄に墮ちん」と。これ大悲招喚の勅命に非ずや。



一。佛の大悲は罪ある者に於てす、衆生佛を念せず、佛常に衆生を憶念し給ふ。かくてバンヤンは光明の大道を辿るを得たるなり。若し然らずんば、罪惡を負ひ地獄を指して生死の巷に彷徨せんのみ。青年のバンヤンは正に我が上のとに非すや。放逸無慚は是れ我れなり。

一。バンヤン既に徹に如來の招喚を聞くも雖ども、直ちに大悲のみ手に絶ること能はず。只管ら其汚穢醜惡なる罪惡に泣けり。彼れ泣て曰く、「予が心の醜惡にして汚穢なるとは、惡魔自身の外、予に匹敵するもの勿るべし。思ふに予は慥に神に見捨てられたり」これ、彼が衷心より絞り出せる血の懺悔なり、彼が自力無功に失望せる煩悶の絶頂なり。

一。されど、大悲常に善巧方便の手を延し給ふ。懺悔は絶望に終り、煩悶は悲嘆を以て酬ひらるゝものに非ず。遂に「慥に神に見捨られたり」

と泣けるバンヤンは、大悲の恩寵に浴し、罪ある者は幸福なりとの大安慰の地に體達するを得たり。嗚呼何の幸ひぞや。

一。バンヤン既に信仰の大天地に歩む、されど未だ淨世の俗事は彼に幸せず。彼の友は彼の成功を羨望して彼を譏構し、彼の最愛の妻は二豎の捉ふる所となり、可憐なる彼の四人の兒は彼の膝下に泣く。加ふるに彼は罪なくして牢獄に呻吟せざるを得ざるに至れり。何ぞそれ不幸なる。されど、こは彼の信仰を試むるの大悲善巧の方便に非ずして何ぞや。

一。バンヤンが十二年の長日子に亘る禁錮は、如何に信仰の牢固たるを證明し、如何に誘惑の頑健なるかを、如來が我等に訓誡し給ふものなるを信せずんばあらず。「天路歷程」は實にバンヤンの信仰の告白にして、バンヤンが此間に於ける誘惑と信仰との奮闘的生涯の叙述なり。



一。斯の如くに、大悲の啓示し給へる、天來の妙音たる『天路歷程』を讀みて。最も切實に味ひ得たるものは、「信ずるは力なり」と是なり。

一。「信ずるは力なり」これ我清澤先生の教示により予の心耳に響き亘れる法音、忘れんとして忘れ能はざる、味ふて味ひ盡きざる靈教なり。予此靈教を『天路歷程』を通して味ふに至りて、益々其意義の深長なるを感ずるなり。然して、此靈教を味ふを得たる光榮を感謝するの念、轉た禁ずると能はず。

一。修道者クリスチャン、謙遜ヶ谷にさしかゝる時、現世肉慾の魔王アポリオンの巨然として突立つを見たり。アポリオン、辭を盡し、現世の快樂を説き、彼の手より永遠の生命を奪はむとしたり、されどクリスチャン信仰を守りて屈せず。アポリオン毒矢を番へて修道者に擬す、修道者

も刀を翳して之に抗す。奮闘半日クリスチャン力歇きて倒る。アポリオン得たりと飛びかゝり、最後の一撃を與へんとせしが、不思議や、倒れたるクリスチャンは。再び起き上り落ちたる利劍を把り却てアポリオンを刺せり。此に最後の勝利は修道者クリスチャンの頭上に下れり。時にクリスチャン叫びて曰く「我等を愛しみ給ふ主の力に頼れば、凡てこれ等の事に勝ち得て餘りあり」(羅馬傳八)と誘惑に充てる行路を行くの我れ、かよはき我れ、信仰の力に頼らずんば、いかで大道を歩するを得ん。尊き哉「信ずるは力なり」の教。

一。修道者の奮闘は之のみに止まらず、或は虚榮府の虜囚となり、或は疑惑城の呻吟となり。或は迷原の陷穽に苦しみ、或は天川の浮沈に泣き。而已ならず、巧言令色の徒、偽善阿諛の輩、異學異見の士、交るく



來りて彼をして大道を譲らしめ、地獄の邪路に導かんとして止まず。奮闘又奮闘。彼が最後に天國に入り永遠の生命を享樂するに至る迄、誘惑は常に修道者を去らず。

一。信仰は唯一の力なり最上の力なり。罪惡に泣く我等は「天路歷程」の主人公と共に行路難と戦ひつゝ、一心正念に如來の大道を進まんかな。

(四成)

一。英國十七世紀の文壇は宗教界に對して偉大なる福音を傳へたる雄篇を遺したり。ジョン・バンヤンの傑作「天路歷程」は即ち是れ。

一。地獄を寫せし書、極樂を描きたる文はあり。されど、人生の罪惡と誘惑とを捕へて靈性の自覺を骨子とし、區々たる戲論、様々の誤信を擧げて正しく天國の門に入るものは、唯絶對地力の信仰にあることを教

へ、而も抽象的心情を採りて具體的説明を試みたるものに至つては、我を善導大師の「二河喻」の文とバンヤンの「天路歷程」に於いて之を見る。

一。宗教の極致は絶對他力の信仰にあり、自己の全體を投じて大靈の光明に依托するにあり。覺束なき人間の理性と、淺薄なる凡夫の智識とは苦界の解説に對して何等の權能をも有せず。吾人は唯金剛不壞の信仰によりて、蕤直專進淨土の園に達すべきなり。「破滅」の都市を脱して天國に旅立ちしクリスチャンは、實は此信仰の權化として描かれたり。

一。信仰や實に救濟唯一の關門也。信仰と如來とを除きては、解脱の門戸は永劫に開くべからず。されど人は肉體の牢獄に虜囚たる以上、縦令へ信仰の後と雖も、未だ容易に無明界裡を脱する能はず。「絶望の谷」「疑惑の城」「名利の市」等は常に吾人をして如來の光明に迷はしめ、「偽



善「懷疑」「執拗」等は屬々來りて吾人を誘惑す。クリスチャンが天路の行程は、即ち彼が貧賤二河の中面に横る白道の歩みにありしなり。

一。彼は幾度か悪魔に苦しめられぬ、數々別解別行の邪見に欺かれぬ。然れども天使は常に彼を護れり。彼が中心の信仰は堅きこと金剛の如く、牢乎として抜くべからざるものありき。彼が神意を信する絶對の信念は群賊惡獸も遂に之を奪ふ能はざりき。斯くて彼は天國の門に進みぬ。

一。空なる一片の妄想と捨つる勿れ、單なる一場の夢物語と斥くる勿れ。大靈の妙用と信仰の權威とは、此偉大なる雄篇の中活躍として不朽に燃えつゝあるに非ずや。

一。パンヤンの此の書を綴るや、彼が十有二年の久しき獄裡に苦楚を嘗めつゝあるの時なりき。かくて胸中炎々たりし彼れが信念は遂に最大

の寓意小説『天路歷程』となりて顯はれたり。卷首彼は此のことを語りて言ふ。「我れ人生の曠野を彷徨うて洞穴ある所に至り、偃臥遂に眠に入り、乃ち一夢を夢む」と。洞穴は即ち牢獄なり、夢は即ち彼が信念の實在なり。現實に見たる幻の影にあらで、迷界にありて彼が認めたる真理の光明の表白也。

一。然り、皆以て虚言戯語誠實あることなき浮世に於いて、彼が認めたる斯の夢のみは、げに永劫不變の真理なりき。彼は此書の上篇を結ぶの詩に於いて「慎んで余が斯の夢の外他事に思を走すること勿れ」といひ「諸子にして若し余が夢むる所を以て捨て、要なきものとなさんか、悲しくも余は再び夢みるの外なけん」と語りたる、如何に彼が此の書に對する信仰の深かりしかを見るに足る。



一。綠蔭風清き處、此書を繕いて靈感禁する能はず。(慈明)

## 五、「往生要集」

小 引

「往生要集」は横川の源信僧都の著なり、僧都、年少くして叡山慈慧の門に遊び、勵精修學、天性聰明にして顯密の教旨を究む。後、名利の念を絶ちて横川に屏居し、専ら修道に身を任れて、世俗を遠かり、著述を以て後昆に垂る。「往生要集」亦横川著述の隨一なり。「往生要集」は巻頭の自序にあるが如く、濁世末代の目足たる往生極樂の教行―念佛の一門を教示し給ふ聖典なり。經論の要文を集め來りて多く自ら述べさせ給はず、要集の名ある所以なり。卷初に於ける地獄界の記述の如きは人口に繪奕する所、而も此書の本領は正修念佛章已下、念佛を勸め給ふ所にあるなり。爾後二百年、法然上人の黒谷に淨土念佛の正宗を開立し給ふもの、此「要集」に負ふ所大なり。

一。夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か飯せざらむ」と、本集の劈頭第一に喝破して念佛一道の絶對的權威を唱道し、自ら稱して顯密の教法の如きは、予が如き頑愚の者の敢てする所にあら



すと述べて、遂に十門に類ちて念佛の一行を讃嘆す。

一。初めの厭離穢土は、是れ信仰の大天地に悟入する第一の關門なり。痛切たる罪惡觀と無常觀とは、吾人をして此世を厭はしめて、常樂平和の樂土を憧れしむ。云ふ勿れ、佛教は厭世主義を鼓吹するを以て、人文の發達を妨ぐるに至ると。嚴密なる意義に於て所謂進歩發達とは果して何の意味ぞや、苟も吾人にして、一朝眞面目に自己及び人世を洞察し來らば、必ずや從來の如く無意義なる幻影を追ふの愚を學ぶを得ずして、こゝに痛切なる厭世觀を惹起するに至らん。かの空なる浮世の甘味に愛着する者に向つて、宗教の關門は永劫に開くの期なかるべし。然り、人生と自己とを棄るものにして、初めて自己と人生を得るものなれ。

一。厭離穢土と欣求淨土とは、必ずや同時に起らざるを得ず。吾人に

して若し前者のみあつて後者なからんか、唯夫れ一の死ある而已、而も其死や又厭離すべきものゝとすれば、吾人の進退はこゝに極まりて、深刻なる苦悶に陥らざるべからず。されど嬉しや「往生要集」は、穢土の厭ふべきを教ふるごとくもに、淨土の欣ふべきを教へたり。吾人は唯蕩然として信仰の大天地に直進するあるのみ。

一、「若し此の獄の豆許の火を以て閻浮提に置かば一時に焚盡せん。況んや罪人の身軀かなる事生蘇の如くなるに長き時焚燒せらる、豈に忍ぶべけんや。此の地獄の人、前の五地獄の火を望見すれば霜雪の如し。」  
一。「又七重の城内七鐵幢あり。幢の頂より火踊る事、猶ほ沸泉の如く、其炎流迸つて赤城内に滿つ。四門の闌上、八十の釜ありて、沸銅湧出し亦城内にみつ。一一の隔間八萬四千の鐵峰、大蛇ありて毒を吐き、



火を吐き、城内にみつ、其蛇の哮吼する事百千雷の如し。」

一。深刻雄大の筆を以て、凄愴悲痛極みなき大地獄の光景を描出して、そいろに眼前に髣髴たらしむるにあらずや。かくて僧都は、餓鬼道と畜生と修羅と人間の厭離すべきを論述して、終りに天上界の厭ふべきを説ぬ。

一。「彼の忉利天の快樂極みなきも、命終らんとするや五衰の相あらわる。初めに頭上の華鬘忽ちに萎み。次に天の羽衣塵垢に著られ、腋下汗出で、兩眼數眵き、終りに本居を樂まざるに至る。是相現はるゝや、天女眷族盡く遠く離れて、之を棄る事草の如し。獨り林間に偃して悲泣し嘆ずらく、我常にこの諸の天女を憐みしに、今にして一旦我を棄つる事草の如きや。我今依るなく怙むなし、あゝ誰か我を救はんとするぞ。」

一。歡樂極つて哀情多しと古人の言ひけん如く、思へ、天上の樂亦三界の無常を免れずして、遂に衰運の悲愁に逢ふて、ひとり煩悶の情に泣く。嗚呼誰が快樂主義を鼓吹するものぞ、有漏の快樂は如何にしても哀感の伴ふを免れず。否、遂には吾人を驅つて、永劫の苦難に沈ましむるを如何にすべし。

一。客觀的に十界の實在を疑ふものよ、請ふ先づ翻つて爾の精神を研覈せよ。沸銅浴鐵を浴びたる如き苦悶を嘗めざるや。鬪争修羅の如く、貪婪餓鬼の如く、暗愚畜生の如き精神に住せざるや。或は快樂の夢一朝醒め來りて寂寥憂愁に泣くの苦き思ひのあらざりしや。若し夫れ汝の胸中少くとも是等の經驗を終へたりと云はゞ、既に汝の心奥に實在するものにあらずや。それかくの如くんは吾人亦敢て煩はしく十界の客觀的實



在を説かざるべし。

一。宗教の信念は、要するに實驗にあり。而して此十界の實在觀は其實驗の發表なり。これやがて人間の思辨と常識とを超越せる靈的實在を意味するものにあらずや。

一。吾人既に厭離穢土の精神あり。即ち欣求淨土の心たる、願作佛心の指導に任せし、念佛無碍の一道に直進せざるべからず。

一。「若し人佛に作らんと願じて阿彌陀を念すれば、時に應じて爲めに身を現じ玉ふ。」

一。「問ふ餘行に寧ろ勸信の文なからんや。答、其餘の行法は因んでかの法の種々の功德を明す、其中に自ら往生の事を説くなり。直ちに往生の要を辨ずるに多く念佛と云ふが如きにあらず。いかに況んや、佛自ら

既に當に我を念すべしと言ひ給へるをや、又佛の光明餘の行者を攝取すと云はざるをや。

一。かくの如くにして、濁世末代の目足たる往生極樂の教行は、偏に念佛の一道となりぬ。絶對他力の信仰となりぬ。曩に厭離せる三界は我活動すべき利他の道場となりぬ。嗚呼かくの如くにして吾人は一躍して自ら作らざりし善根の主となりぬ。偉人源信の實驗の發表たる要集の指導、我さゝやかなる胸に映れる所唯夫れかくの如し。(習學)

一。花に憧るゝとき、われ等紅顔に温情をたゝえぬ。月に嘯くとき、われ等玉貌に才智をしめしぬ。されど、こは唯一時なりしよ。會々、狂風一たび吹き、妬雨一たび來れば、内に裂けむすの煩惱は、忽ち沸然として燃え、月は怨恨の血に煙り花は淫逸の塵に汚れぬ。恐るべきは罪の



我等なるかな。

一、げに恐るべきは罪の我等なるかな。見ずや囀る鳥は鳴く虫を食ひ、躍る狐は囀る鳥を捕え、而して人は躍る狐を殺す。若たま〜相見れば獵者の鹿に逢へるが如く、各鐵の爪を以て互に掴み裂く。血肉既に盡て唯殘んの骨のみ」風吹き、日曝し、雨灌ぎ、霜封す。げに淺間しきは迷の我等なるかな。共に「皮を破り、穴を噉み、骨を折り、髓を啖ひ」紛々乎として蜂窩を亂す如く、而も現に小水の魚たり、屠所の羊たるを知らず、徒に「一生盡くと雖希望は盡きず、遂に白日の下を辭して、獨黃泉の底に入る」。吁々。

一。よろづのと實あるなき「自利の行」は、「是れ菩提心の所依に非ず」。われ、和尚が「往生要集」を以て、忌むべく頼むべからざる自力を破棄せ

よとの警策を與え給へるに向つて感謝す。

一。極惡の我なり。されば「如來は常に我等を照し」給ふ。聞く「梅樹の樹の出成する時、よく四十由旬の伊蘭林を變じて、普く皆香美ならしむ」と、まこと、如來の忍辱光は我瞋恚を滅し給ひ、如來の精進光は我懈怠を勵まし給ひ、如來の禪定光は我散亂を誡め給ひ、如來の智慧光は我愚惑を照し給ふ。かくて我れ御名に活くとき、心水自然に四弘誓の渠に流入して平安なり。

一。嗚呼「往生之業念佛爲本」は、これ頑迷度すべからざる我等に對する唯一の復活劑にあらずや。萬年の暗室も日光暫く至れば暗頓に除かる。我この御名を稱ふるとき、靜に天の一方より清涼の風吹き來りて猛火忽ち消滅す。否、われ「如來の名號功德を稱說せば、諸の衆生はよく



黒闇を離れ、漸次に諸煩惱を焼く。願作心はそれ自ら度衆生心にてありき。

一。われ、先師が『往生要集』を以て、唯これのみぞ實なる念佛を示し愚昧の我をして絶対の大悲に依らしめ給ふ事に向つて感謝す。

一。『往生要集』は他力信仰の極致を其儘に示せるものなり。人よ、我に懺悔を求むるか。乞ふ直に來りて本書を拜せよ。吾人の言はむとする所は、本書の一句にだも及ばざればなり。人よ、本書に説く所の地獄を以て唯一片の譬喩となさされ、訓誡とな思ひよ。我等は現に之を見、之をなしつゝあるにるらずや。我に利智ありと云ふか、精進ありと云ふか、咄、こはそも何の烏辭ぞ。

一。罪惡の自覺と慈悲の融化とは、これ即ち信仰なり。如來に向つて

の○自○我○の○全○き○没○入○と、如○來○に○よ○り○て○の○一○切○の○受○得○と○は、こ○れ○即○ち○第○一○義○諦○な○り。善○導○大○師○は○其○著○『散○善○義』に○於○て○既○に○之○を○示○し○給○ひ○ぬ。さ○れ○ど○我○等○頑○魯○の○もの、直○に○又○我○に○歸○り○て○圍○圍○の○生○活○に○溺○れ○む○と○す。茲○に○『往○生○要○集』は○再○び○我○に○向○つ○て○我○思○の○自○殺○と○永○遠○の○復○活——如○來○に○向○つ○て○死○し、如○來○に○よ○り○て○蘇○る——と○教○ゆ。何○れ○か○こ○れ○大○悲○の○御○聲○な○ら○ざ○る。

一。「われ、今智の火分あらざるが故に、煩惱の水を解いて功德の水となすと能はず。願はくば佛、我を哀愍せよ」。南無阿彌陀佛。

一。聖教に向ふ時歡喜常に新なり。(祐義)

一。源信僧都の『往生要集』三卷、是れ予の嘗て一讀したるの書也。其時、余は是れを平凡の書と考へたるか故に、爾來此書を放棄したり。頃日、故ありて再び是れを讀みたるに、清新の感興、泉のごとく湧けり、



嗚呼不思議なる哉。

一。此書開卷、厭離穢土篇の記事、之れ接絶なる哉。僧都が沈痛激越の想と、深刻蒼勁の筆とを以て寫せる此篇の悽味は「觀無量壽經」序分に於ける、王舍城悲劇の主人公、韋提希の苦闘と共に到底想像し難きもの也。况むや地獄界餓鬼界畜生界、さては阿修羅界の記事、皆以て頑迷固陋なる人情の影たるを知るに於てをや。汝等蝮の裔よ、汝等罪人よの叫び、四發亂叫、予は到底靜かに讀過するに堪へざる也。誠に是れ虛妄偽善を碎破する鐵槌たる也、謠詐虛榮を熾熾する猛火たる也。

一。念佛の主張、これ此書第三篇已下の骨目なり、本身なり。諸行の語明、これ只その衣服たるのみ。されば此書の念佛は、「歎異鈔」の如く、「御一代記聞書」の如く、裸體的宣言に非ずして、「觀無量壽經」のそれの

如く、服裝的宣言也。これ予の味ふ程ゆかしく思ふ所也。何となれば、予は裸體美のそれよりも、服裝美のそれをゆかしく感ずるものなれば也。

一。念佛、开は少くとも罪人のたどるべき唯一の活路也。念佛、开は少くとも罪人の救はるべき唯一の力也。顯密の教法其文一にあらず、事理の業因其行惟れ多し、利智精進の人は未だ難しとせず、予か如き頑魯の者豈敢てせんや矣、「今念佛を勸むるは、只是れ男女貴賤の行住坐臥を簡はず時處諸縁を論せず、之を修するに難からざる」が故なり。「極重の悪人他の方便なし、唯た念佛を稱して極樂に生ずるを得る也」。

一。念佛、开は倫理唯一の根底也、念佛、开は道德唯一の動機也。「人ありて日日の中に於て、如來の功德を稱説せば、この諸の衆生黑闇を離



れ、漸次に諸の煩惱を焼くことを得べし。是の如く南無佛と稱念する者は、語業空しからず、如是の語業をは大炬を執て能く煩惱を焼くと名く。

一。念佛、开は無碍の一道なるか故に、事實上罪人をして絶待的安慰を得しむると共に、罪人をして自然に道德化せしむる也。かくて予は臆面もなく、念佛の萬能を謳歌せむ哉。

一。首楞嚴院の僧都源信の遺篇、「往生要集」一部。敢て大冊と云ふべからず、されど、予は此所に宇宙唯一の真理が遺憾なく説明せられたるを知れり。かくて予は今日より是れを愛讀の書となさざらむとするも得ざる也。(成度)

一。我れ「往生要集」を拜誦する毎に、鬱蒼たる夏木立の森にふみ入り

て、清涼の風に吹かれつゝ、渴を清澄の泉に醫するが如く感するなり。げにや華嚴、法華、淨土さては佛一代の教法の夏木立は正に是れ塵垢に汚れ、靈教に渴へたる我等凡迷をして、安らかに念佛の泉を汲ましめんが爲の方便にぞあるなり。

一。横川の首楞嚴院、白雲近く僧房を鎖し、涼風遠く湖上より來る。

此寂寞の仙境にありて僧都源信は靜に人世を觀じ、寧ろに古聖の遺教を誦して専ら思を西方極樂の境に廻はしめ給ひぬ。かくて「往生要集」は成りぬ。

一。我れ一夜涼を東台に透ふ、夜深く涼客悉く去る。我れ獨り几に倚りて危動の心を疑らす。心漸く靜かにして、涼味漸く加はる。心靜身涼にして、都塵の喧騒は我靜耳を驚かすと漸く切りなり、我れ都塵の擾々を



觀じて靈感切りに湧く。嗚呼、山に入りて山を見ず、都塵に汚れて都塵を知らず。浮世に憧がるゝもの豈浮世を觀するを得んや。『往生要集』は正に是れ天上の淨界より觀じたる下界の記述に非ずや。我れ等浮世に憧るゝもの暫く『往生要集』に耳傾けて、濁世末代の目足を觀せずや。

一。我れは直ちに源信和尚が觀じ給へる人間相を味はんか。不淨相、苦相、無常相の三は人間相の凡てなり。

一。「少より老に至る迄唯是れ不淨なり、たとへ海水を傾けて洗はんとも淨潔ならしむべからず。外には端嚴の相を施すと雖ども、内には諸の不淨を裏む、猶し畫瓶に糞穢を盛るが如し」。高眉翠眼皓齒丹唇なりといふも、一聚の尿に粉を以て其上を覆ふが如し、亦爛屍の假に繪彩を着るが如し、尙眼以て見るすらも得ず、況んや身近すべけんや」。まこと

や、我れ我れに愛想づかしする程の恐ろしき穢れの心、我れ我れを欺く偽善虚假の想、其出づる源の穢れや深し、ア、我れ是をいかにすべき。

一。「我身に二種の苦を受く、眼耳鼻舌咽喉牙齒胃腹手足に四百四病生じて、其身を逼切す。これを内苦とす。此身獄に在り、搥打楚撻せられ、耳鼻は削られ手足は削らる、又蚊虻蜂等の毒蟲の爲に咬食せられ、寒熱飢渴風雨并に至り、種々の苦惱其身に逼切し、行住座臥暫くも休息せず之を外苦となす」。浮世は牢獄なるのみならず、肉體は囹圄なり。此に吾人は懊惱を絶つ能はず、自由と安樂とは、我等に來らず。ア、之を如何にすべき。

一。「此日已に過れば命即ち減少す、小水の魚の如し、斯に何の樂みかあらん」。梅陀羅の牛を驅て屠所に至るに歩々死地に近くが如く、人命



## 偉人の言行

も亦復是の如し」。「無常の殺鬼は豪賢を擇はず、何ぞ之に怙恃して安然百歳を希望し、四方に馳求し、貯積聚斂す。聚斂未だ足らざるに溘然長逝せば、所有の産貨徒らに他の有となる」。「恃むべからざるを待み、依るべからざる力に依る。かくて晏然として行途の地を見ず、茫々寥々、浮世に憧がるゝの我等。若し刮目、人生の真相を觀じ來れば、誰れか道を求むる、頭燃を拂ふ如くに急がざらんや。かくて我等はいかにして、常住の地に進むべき、ア、いかにすべき。

一。「極惡深重の衆生は、他の方便さらになし、ひとへに彌陀を稱してぞ、淨土に生るとのべ給ふ」これ厭離穢土を痛切に觀じ給へりし源信僧都の信仰なりき。

一。「煩惱に眼さへられて、攝取の光明見ざれども、大悲ものうきこと

なくて、つねに我身を照すなり」と、こは源信僧都が衷心よりの歡喜に非ずや。

一。かくして「往生要集」を讀み了りたる我れは、天界より響き來れる如來矜哀の德音に接するなり。汚穢に充てる我肉團は、こゝに意義あり、光明あるものとなり。苦惱に満てる我陰身は、こゝに希望と慰安と感謝に充てる靈體となり。無常轉變の我瘦軀は無量光、無量壽の常住の地に据えられたり。ア、何の至幸ぞや。

一。かくして我等は源信僧都を以て歴史已上の大偉人と感ぜざるを得ず、親鸞聖人と共に、僧都に於て如來の化現身を拜せずんばあらず。(圓成)

## 偉人の言行



## 六、『我宗教』

小引

露西亞の哲人レオ、トルストイ翁が、千八百八十四年、莫斯科の陋巷、六花繡紛として玻璃窓を打つの時、敢て一言隻句も苟くもせず、自から無量の靈意と萬斛の心血を瀝して成りたるもの即『我宗教』の一篇なり。

一。『トルストイ』翁は、眞に、余が恩人なり。

一。余は翁の著書を多く讀みたるものにあらず。只『我宗教』と他の二部を看たるのみ。而も、余の心身に斯る偉大なる變動を起し、余をして、今日の如き絶對的幸福の境に入らしめたるものは、主として『我宗教』の導きに依りたるなり。

一。余が『我宗教』を讀みたるは、勿論原書に依らず、又英譯に依

りしにもあらず。乃ち加藤直士氏の和譯によりて之を讀みたるなり。氏の文は率直にして雄健、能く著者の意を傳ふるものあるが如し。余は翁に謝するとともに、氏を思はずんばあらず。

一。余が翁を徳とし、『我宗教』に負ふ所ありといふは、翁を以て、他の宗教家よりも勝れたりとし、『我宗教』を以て他の宗教書類よりも善良なりとせんとすの謂にはあらず。只、余が今日の如き絶對的幸福の境に入りたるは、偶『我宗教』を導火線としたるものにして、余一個に取りて、此書に對する不可思議の因縁を感ぜざるを得ざるを云ふのみ。

一。蓋し、一切の人物を大別して、悟れるものと迷へるものとの二種となすべし、隨て、一切の書籍を大別して、迷の説明と悟の説明との二種となすべし。而して『トルストイ』翁は悟れる人物なり、『我宗教』は悟



の説明なり。此點に於て「我宗教」は明に「バイブル」「藏經」「四書」「老」「莊」等と其列を共にすべきものたるなり。

一。等しく悟れる人物といふ、其衷心、自力我慢の執着をすて、無我平等の愛に歸するは即ち同じと雖、殘存する所の差別迷妄の習氣、人によりて其分量を異にするを免れず。是に於てか、悟れる人物中、悟りの書籍中、亦自ら其價值の高下を生ぜざるを得ず。此點より論すれば、「トルストイ」翁の「我宗教」の如きは、最も自力の習氣多き書籍の一なるや明かなり。

一。今試に、自力の習氣より來れる此書の瑕瑾として、余の心に浮べらるもの二三を指摘せんか。

一。世界只基督一人を尊しとし、之を崇拜するの餘り、他の諸宗教の

美點を看過して、一切取るに足らざるものと誤認せること、是れ其の一。  
一。基督の所謂五ヶ條の垂訓を偏重するの餘り、信仰の内容をして極めて窮屈ならしめたること、是れ其二、

一。外形的實行を重んずるの餘り、病者老者の如きは、殆んど信仰を斷念せざるべからざるが如く思はしむるもの、是れ其三。

一。さはれ、是等の欠點は、多く翁自身の位置上、最も去り難き自力の習氣より起れるものにして、是を以て翁を責むるは、稍々酷に失するの嫌なきを保せず。況んや、是等の欠點は、偶ま以て、翁の熱情を示すの資となれるに於てをや。

一。若し夫れ其特長の點を擧げんが、其眞摯にして懇切を極むるは、信仰の書の通性として、特に之を云はずとも、其、信仰の純利他性を發



揮せること、信仰を以て現世問題の解決を試みたることは、實に此の書の二大特性といふべし。

一。信仰を以て、只未來問題に關するのみと思へるものは、來りて此書を見よ。信仰を以て、只自己の苦痛を去るのみのもと思へるものは、來りて此書を讀め。

一。願作佛心はすなはち度衆生心といふにあらずや。衆生の願樂ことくくすみやかにとく満足すといふにあらずや。稱名はよく衆生一切の志願を満つといふにあらずや。

一。「我宗教」は余が最も恩ある書籍なり、余は此書の絶對的價値を信す、故に仰げば愈々高く鑽れは愈々堅きを感す。余が已上の言、此書をして愈々堅く愈々高からしむの一端ともならば幸なり。

一。朋友の書中に云ふ、「北歐の大聖、我等嬰兒は汝の慈悲の胸によつて活ることが出來た、我等兄弟が再生の親は汝である」と。然り、實に然り。

一。記し終りて床間を見れば、翁の肖像、長へに無我の愛を湛へて余を見下しつゝあり。(證信)

一。豫言者あり、其聲や高く大にして俚耳に入らず、よし入りたりとするも唯に驚怪して現世のものに非すとなさん。亞非利加森林の黑人に對して釋迦基督の慈悲仁愛を説くも、彼等之れを欺瞞の言として嘲笑するに非ずんば、無意義無用の空言となさん。常人の見聞して了解する所のものは、常人より組成せられたる當代思潮の平準を出でず。彼等は耳官の如し、識域以下の微音を聴取す能はざると同時に、識域以上の響音



を聴取する能はざるなり。豫言者の聲は常人に對する識域以上の聲なり、誤解冷嘲誹謗迫害を以て報はるゝまた宜ならずや。されど、豫言者の聲は絶対性を有して不滅實在なり。衆俗の凡思潮、泡のごと消え雪のごと融解し去る中に屹立し、唯彼のみ千歳を徹して永遠の光輝を放つを見ずや。我はトルストイ翁に於て之を認む。

一。豫言者の生涯は、冷嘲なり誹謗なり迫害なり。世は己と同化し得るものに非れば、之を容るゝの寛廣を有するものに非ず。時代思潮は流水の如し、如何なる大盤石も、彼に遇えば其圭角を磨滅せられざるを得ず。獨り豫言者あり、彼稜々たる圭角を以て世に立つものなり。平準以上の聲を放て絶叫するものなり。宜なる哉、冷嘲誹謗を浴び迫害殘虐を以て報はるゝこと豫言者の聲。然り絶対性を有せり、されど彼また人な

り肉の人なり、幾多の過失なきを得ず、缺點なきを得ず。否、彼は常人以上なるだけ常人の有する能はざる過失をも有せり。嗚呼彼と云ひ之と云ひ、衆目環視、冷評蜚集、靜に傍より之を観察すれば、一世の誹謗打撃によりて、豫言者彼れ完膚なきに至らんとするなり。豫言者、彼幸か不幸か、我トルストイ翁に於て之を認む。

一。豫言者は幸か不幸か、然り彼には冷嘲罵詈あり迫害あり放逐あり、浮世のあらゆる苦難は彼を見舞はずんば止まざるなり。されど、嗚呼されど、彼には世人の有する能はざるあるもの、如何なる迫害を以ても打壞すべからざる或物を有しぬ。何ぞや、彼の自覺は世より得たるに非ず人より得たるに非ず。世より得たるものは世と共に亡ぶべし、人より得たるものは人と共に亡ぶべし。唯それ彼の自覺は、世と共に亡びざる



人〇と〇共〇に〇亡〇び〇ざる〇絶〇待〇至〇上〇の〇靈〇源〇より〇得〇た〇る〇も〇の〇な〇り〇。見よ、彼の自覺は、過去永遠の無始より未來永遠の無終に渡り、上九天をきはめ下九地を盡して亡びざる實在性を有することを。靈源、こは汲めどもつきざる歡喜の泉なり、深くして底なき平安の基礎なり。我はトルストイ翁に於て之を認む。

一〇釋迦大覺嘗て説き給ふ、「他人の汝に語る所にして、時を得ざるに時に合へるとあらむ、眞なると眞ならざるとあらむ、軟なると堅きとあらん、慈しめると怒れるとあらむ、義あると義なきとあらむ。汝等若し之を聞きて、心そのために變り、若しくは悪言を口にする者あらば、我は説く、汝等は之に因りて必ず衰へんと、汝等決して斯の如くなるべからず。他人その如く説くを聞くとも、汝等心その爲に變らず、又悪言を

口〇に〇せ〇ず〇、怨〇敵〇に〇向〇み〇て〇慈〇愍〇の〇心〇を〇起〇す〇べ〇し〇。心〇、慈〇と〇俱〇な〇ひ〇て〇一〇方〇に〇遍〇滿〇す〇。是〇の〇如〇く〇し〇て〇心〇は〇三〇三〇四〇方〇維〇上〇下〇、普〇く〇一〇切〇に〇及〇び〇て〇結〇なく〇怨〇なく〇恚〇なく〇諍〇なく〇、極〇めて〇廣〇く〇且〇つ〇大〇に〇一〇切〇世〇間〇に〇遍〇滿〇せ〇む〇。」「牟利破群那經」我は此の意味に於てトルストイ翁の無抵抗主義、非戰爭主義に讀す。(龍造)

一〇天下に若し壯嚴の文字ありとせば、そはヒマラヤ絶巔の眼界か、あらず、ナイヤカラ瀑布の奔流か、あらず、唯他力天眞の妙境に於てのみ之を見る。即ち久遠劫來、苦より苦に入り、冥より冥に入り、罪惡生死の深淵に悶絶せし凡夫が、宿善こゝに開發して、無礙難思の光耀に光被せられし他力不可思議の信心海は、天の壯嚴地の美觀と雖も、遠く企及すへからざるところの妙境なり。



一。嗚呼宇宙に於ける、至大至高の妙境に逍遙する人は、最大幸福なるかな。北露の巨人、否な新世紀の預言者、レオ、トルストイは、實に之を享有したる一人なり。而して彼の茲に至りし所以は如何。彼の前半生は、社會の寵兒として、萬人の羨望措く能はざる、榮譽ある位置を有したりき。一管の筆を呵せば、洛陽の紙價をして高からしめ、一縷の想を馳すれば、天下の讀書子をして狂喜せしめたりき。されど記せよ、一度ひ人生の矛盾を喝破するや、得意の順境は、忽ち繩と釘とを携へて自殺を謀らんとするの、死地と化せしを。「叩かば門は開かれん」煩悶懊惱の後、自力我慢の迷霧を脱却して、絶對他方の光明に入れり。

一。隨て彼は自利的活動を抛ちて、純乎たる利他的活動を取れり。「吾か心石に非ず轉すべからず、吾が心蓆に非ず卷くべからず」。彼は帝王の

諫止と、教會の破門とを排して、懣勃禁する能はざる信仰を、忌憚なく表白し、其の福音を宣傳せり。其著「我宗教」は即ち是れ。

一。滔々數千萬言、説き去り説き來れる一篇の旨歸は、一言にして盡く、曰く、爾の敵を愛せよ！即ち自利的活動を抛ちて、利他的活動を爲すにあり。無我を経とし、愛を緯とせし、無我の愛の福音なり。こは曾て佛陀の宣傳せしところ、基督の絶叫せしところのものにして、最古最新の宇宙の眞理、萬古不易の人生の眞諦なり。

一。パリサイ、サドカイの徒を、蛇蝎視して止まざりし基督の如く、彼は亦、現代の社會を蛇蝎視せり。學者政治家宗教家等、一切、自力我慢の醜類を、悪魔の權化として、之を咒咀せり。劫火焰々として大千世界を焼くか如く、劫運の風、天柱地軸を抜くの概あり。



一。かくて、手に平和の鋏を取り口に無我の愛を宣傳しつゝある、親愛すへき老翁の風采は、彷彿として紙上に活如せるを覺ゆ。(幽玄)

一。世は混濁せる物質的主我的の渦中に埋没して、宗教の眞精神は滔として地を拂ひ、實行其跡を斷ち、信念萎痺して復た見るべからず。この墮落せる現代思想界に處する翁の理想は、他なし、之を廓清し、之を逆倒し、直ちに世界を打て、聖なる神の國を顯現せんとするにあり。其抱負は光明の一大樂園を築かんとするにあり、世を擧げて無我の慈愛を還さんとするにあり。

一。言ふ所の無我の慈愛とは、聖書の所謂「人爾の右の頬を打たば、亦ほかの頬をも轉らして之に向けよ」といひ、「目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へる事あるは、爾曹の聞きし所なり、然れども我れ爾曹に

告げん、爾曹惡に敵する勿れ」といふもの是也。この無我の慈愛の大精神は、全福音書を通じて一貫せるものに非ずや。

一。見すや、彼が權門を棄て、爵位を顧みず、名利を抛ち露國の羈絆を脱し、下て自ら世界の公民と呼び、弱者の大慈父となり、大樹籬者となりて之が實踐躬行に餘念なきを。その著「我宗教」は實に翁が滿腔の熱誠より進出したる絶叫にして、又翁の生命也、是れ世の光明也、活人劍也。

一。思へ、翁は自我を棄て、唯、無我の慈愛を實行する外、何物も能く人類に與ふるに、眞の幸福を以てする能はざるを主張し、この道に依てのみ、生命は永遠の滅亡より救はるべきを説き、而も是れ宗教の精髓にして神の恩寵たるを讃しぬ。



一。然り、渾て彼が言動を貫くに無我の愛の實行を以てしたり、其氣宇や高正剛直、其確信や奮ふべからず、彼が眼中、王威政權なき素より其所也。而して彼れ、平和の福音者たる耶蘇の、十字架上の露と消えたるを想ふ時、一派の論者が翁を目して、狂者と呼び、愚者と嘔ひ、罪者と咀ふか如きは、翁に於て鐵牛角上の蚊虻に過ぎざる也。

一。若し夫れ、この警覺に醒めて自覺せざらんか、世は混濁益甚だしく、其渦流は益強大ならんのみ。噫、世の空論に馳せ空想に耽るの徒、富に酔ひ利に睡むるの輩、耳をこの叫びに欬て、來て大靈攝護の下、慈愛の樂園に活きずや。(法皇)

一。宗教の根本的改新とは、畢竟其宗教の眞髓を覆ひたる虚禮、虚偽、曲解を排して遠く教主の古に復歸するにあり。「我宗教」一部の主張、蓋

し。バイブル其儘の清新なる意義を發揚實行せんとするに存す。されば今日の基督教徒が、其バイブルに人爲の衣服を着せ、不自然の冠を着けしめたるに反して、「我宗教」は赤裸々に基督の言を體現して此世に臨めり。

一。「惡に敵する勿れ、而して汝を害するものに善事を行ふべし。是れ耶蘇の明かに命する所、其中に何等の曖昧なく又誇張なし。余は讀んで字の如く此語を解するに當りて、初めて其中に樞軸的眞意を捕ふるを得たり。」神の眞意は、かくて迅雷の轟くが如く、他の基督教徒の頭上に臨めり。彼等は天の一方より此の激越なる大音を聞いて驚愕しぬ。嗚呼。是れ沈黙二千有餘年の聖語、今や再び翁の口を籍りて。我世に宣傳せられしにあらずや。



一。弱肉強食の世なり、溷濁汚穢の世なり。宗教は、教を枉げて現世の人欲に媚び、教育は、唯自我の満足を事とする時。赤裸々の聖語は突如として下れり。悪に敵する勿れ」「審く勿れ」と。かくて「我宗教」は當代の宗教を否定し、法律を擯け、政治を排し、教育を咀ふ。これや還元復古の清新なる宗教が、虚偽の文明に對して挑戦せる壯絶快絶の宣戦にあらずや。

一。夕陽天涯に輝きて靜かに吹き來る夕風のそよくと草葉を渡るや余は常に如來慈愛の徳風に浴するを覺えたりしが、「敗て問ふ豫言者イザヤは如何にして神を發見したる乎、林を倒すの疾風にか、曰く否、天に閃く電光の中にか、曰く否な、岩を劈く地震の中にか、曰く否な、神は實に草葉を渡る軟風の中に現はれ玉ひき。是れ豈に「悪に敵する勿れ」と

の語に對する壯嚴なる適例にあらずして何ぞや」を讀むに及んで、圖らずも余が感想が古人の夫れに合し、同時に「我宗教」が、神の慈愛を説明するに須るたるの偶然ならざるを深くも感じたりき。爾來余はそよ吹く軟風の上常に如來の溫容を拜し、「悪に敵する事なくして唯开を愛せよ」てふ教訓に接するを覺ゆるなり。

一。「學術と哲學とは到底人心の判官たる事能はず、彼等も亦畢竟人心の奴僕たるのみ。」然り、是れ虚偽の文明に眩惑せられたる吾等の頭上に下れる三十棒にあらずや。至高なる靈柱を下して奴僕の足下に跪くの痴態を演じたる吾等は、直ちに起つて彼等の眞價を覺り其舊陋を棄つる事、弊履を脱するが如くにして、吾等の靈性を價値あらしむる見地に立たしめざるべからず。



一。要するに「我宗教」は翁が實驗の叫にして、無限の靈覺より流れ出し活ける大文字なり。(習學)

### 七、『傳習錄』

小 引

傳習錄上中下三卷、論語の「傳不習乎」によりて題名せしものなりとす。是れ實に王學を修むる人の寶典にして苟くも王陽明の說を窺はんとする者の必須好津梁なり。此の書も、王門の顔曾と呼ばれし徐愛薛侃二生が、陽明先生平生の坐談手簡の如きを集録したるものにして、二生未だ之を刊行するに至らざりしを、先生四十七歳の時陸澄と相謀り、虎の地に於て上梓せしが、その後南大吉兄弟之を追補し、更に錢德洪に依て再び増補改刻せられしものなりと云ふ。

一。『初溺於任俠、再溺於賦財、三溺於詩章、四溺於神仙、而五溺於佛氏、正德丙寅始歸正于聖賢之學、』(行狀記)、今の人は餘りに恰愼なり、發明なり、小賢かしく利口なり、生嚙ちりなり、半熟なり、大に溺れず故に大に浮ばず、大に迷はず故に大に悟らず、一生平々凡々として徒らに墳墓の土たるを戀ふ。氷おほきに水おほし、さはりおほきに徳お



## 行 音 の 人 偉

ほし、屈するは神びんが爲なり、溺るゝは浮はんが爲なり、迷ふは悟らんが爲なり。迷へ、悟らん、窮せよ、通せん、夫迷は自覺を喚起す、自覺は精進を喚起す、精進は大悟の門なり。夫迷は實に大悟の一步なりと知らずや、吾か主伯安先生は其の前半生を溺の一字を以て示せり、任侠に溺れ賦財に溺れ詩章に溺れ老佛に溺れ、大に溺れて遂に大悟の一步を開けり。端しなくも吾か心の影を認めて、其の亂心の危動に驚ける先生は、茲に向上精進の行程に入りぬ。魍魎魍魎の地、瘴癘蟲毒の處、貴州の龍場は先生の爲には實に向上の靈堂なりき。げに勇ましき向上の戰士の面貌を龍場の先生の上に見すや。

一。天の將に大任を人に下さんとするや先づ其人を試む。いか許り龍場の生活の困難なりけん、夷地遠く中華を離れて土語通すべくもあら

## 行 音 の 人 偉

ず、連連落泊具に困苦を嘗め窮阨を忍び、而も身は肺を患ひて臥床甚だ安からず。遇々家信を得れば劉瑾の事未だ平がすして父は其の職を罷めたるを聞く、嘆じて云ふ、「得喪榮辱の念、能く超脱し得るも生死の一念甚だ安からざるものあり」と。已にして従者皆病むに及びて、自ら病軀を起して薪を樵り水を汲み、従者の病を看ざる可からず。先生はこの危境に處して、徐ろに吾か心の跡を跡づけぬ。播かれたる種は遂に實を結はざる可からず、叩かれたる門は開かれざる可からず。先生は遂に一夜夢中の人と語ると覺て大悟の靈境に入りぬ、呼躍して曰く、「吾か心の裡に天の聲あり」と。傳習錄三卷其載する所、實に先生か心裡の天の聲たるなり。

一。「心は一也、未だ人に雜ざる、之を道心と謂ひ、雜ゆるに人偽を



以てす、之を人心と謂ふ。人心の其正を得るもの即ち道心、道心の其正を失へるもの即ち人心、初より二心あるにあらざるなり。人欲の汚れを去りて、其處に天理の淨きを見よ、靈光四閃して、とはなる天來の響をきかん。

一。「虚靈不昧衆理具つて萬事出つ、心の外に理なく心の外に物なし」さるを愚かや吾か心を外にして智を求め識を求め利を求め物を求め。智識愈々廣うして人欲愈々滋く、才力愈多くして天理愈蔽ふ。究むる事愈深うして去る事愈遠し、只夫れ心を修めよ。心は明鏡の如し、是の一個明なれば則ち感に随つて應ず、物として照さざるなし」と。吁是れ何等尊き天來の響きぞや、正に是れ現代の文明に下されたる痛激なる三十棒にあらずや。自覺なき文明は沙上の家のみ、自己を外にせる討議と研究

は空論なり空議なり。虚文勝つて實行衰ふるは天下の異亂なり。唯夫れ汝自身を知れ、汝か心靈の聲に耳傾けよ、汝か心の救済に勤めよ、かくて汝の文明をゆるぎなき巖の上に立てよ。宗教なき國家と信仰なき國民とを有して、ひたすらに外にのみ向はんとする文明は、先生の痛棒を要するやいと切なり。

一。盡日春を尋ねて春に遇はず、歸りて吾が庵の老幹枝頭の春色已に十分を見る。一度びは罪に悶えて救ひの御手を尋ね廻りぬ、野に山に御親の御影を逐ふて走りぬ、されと夫は愚かなりき、心影は逐ふ可からず、却つて吾が心の中に顯れ給ふにあらずや。吾等翻つて吾等が汚れたる心を研覈し來るとき、茲に煩惱海中如來清淨の顯現を見奉るを得、大悲攝取の光益に預るを得たり、一度ひ佛に接し奉りて心外の法界を見



る、水紫花明星燦月輝、至る所に如來大悲の御手に觸れて、法界莊嚴の光輝を見奉るを得るなり。

一。先生人に書を興へて曰く、「山中の賊は破り易く心中の賊は破り難し」と。我等一度ひ我れの自覺に返りて我が心の跡を跡づけんか、誰か我が亂心の危動に驚かざらん。定水を疑らすと雖も譚浪類りに動き、心月を觀すと雖も妄雲尙蔽ふ、自利私欲の心止まず、嫉妬讒譏の念絶えず。刹那々に造り行く罪の大なるを思は、誰か得て安閑たるに堪へんや、釋迦は之に依て王宮を逃れ親鸞は之に依りて百日の密行を務め給へり、されば眞摯なれ熱誠なれ、飽くまで其心を跡づけよ。沈痛悲壯なる罪惡觀は其處に初めて如來矜哀の大悲に觸れて頓悟一番して信樂の行人たるを得せしめん、生死の一念茲に能く超脱するを得ん。

一。先生弟子に訓へて曰く、「私欲日に生ずる事地上の塵の如く、一日掃はされは便ち又一層あり、著實に功を用ひて便ち見はる、道に終窮なし愈々探つて愈々深し」と。

一。蓮如上人宜はく「さりながらそのまうちすて候へば信心もうせ候へし、細々に信心のみぞをさらへて彌陀の法水をながせといへる事ありげに候」と。

一。吾等茲に先生の上に、蓮如上人の尊き御化導を仰くを得たり。

一。「平旦此の心未だ物と接せず、清明の景象伏羲の時に在て遊ぶと一般なり」我、曉風に窓を開いて先生の遺書に接し、靜かに耳を實驗の聲に傾く、爰に未盡の味あり、不斷の曲あり、呼聲自ら禁せざるものあつて存す。嗚呼如何なれば今人徒らに空論を事とし、漫に先生の説を議し



其哲學を論ぶものゝみの多きや。(智善)

一。吾人の精神は常に二方面に向つて動く、一は外界にして他は内界なり。名を求め、愛を思ひ財を望むは是れ外に向へるなり、靜かに我心内に向つて自己の能力と價值とを省察するは内に向へるなり。我精神の基礎未だ定まらずして浮雲の如くなるに係らず、徒らに影の如き幻の如き物界の事象を追ふて罵り狂ひ叫び悶ふるは、吾人の常にあらずや。されど哲人は先づ自己の何たるかを内観自省す。先哲陽明が吾人に教ふる所畢竟こゝにあり。

一。「色を好めば一心好色の上になり、貨を好めば一心好貨の上になり、以て主一となす可きや。是れ所謂物を逐ふもの、主一にあらざるなり、主一は是れ専ら一箇の天理を主とす。」

一。内界は主にして外界は客なり。精神は本にして物界は末なり。然り天地萬有は此根本樞軸たる吾人の精神を中心として回轉す。されば我心一度如來の大心に立たんか、宇宙と人生は我爲に盡きせぬ慈光を送つて、吾等はこゝに心靈界の王者となる。

一。道は近きにあるものを、愚かしく之を遠く空漠なる客觀に求めて得ず、又徒らに幽玄高遠なる佛界に憬がれて、辿らん術を知らずして茫茫たる無信の曠野に彷徨ひて、孤獨幽愁に泣く友よ、試みに爾の胸奥深う分け入りて衷心なる光明に接せずや。若し裏に向つて尋ね求めて自己の心體を見得するを解しなは、時となく處となく此の道を見ざることなけむ。

一。自己の心體とは何物ぞ、吾人の心體は眞如ならむ、實相ならむ、



如來ならむ。されど現在の吾人は如何にしても凡夫なり、弱者なり、罪悪者なり、迷者なり。「妄念は凡夫の自體なり、妄念の外に別に心のなきなり」と宣給ひし先哲の言の如く、吾人の心體は飽く迄でも妄念其物なり。されば此心體を見得すと云ふは何を意味するや、瓦礫は如何に試験せらるゝも瓦礫たる如く、妄念は亦如何に見得すればとて依然として妄念にあらずや。

一。されど嬉しや、吾人はこゝに衷心なる光明を見たり、瓦礫の間より、暗雲の渦く妄念の間より如來の光明を拜しぬ。「衆生貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生心を生ず」。外に求めて得ざりし如來の靈光を、吾人は今や我胸奥に認めたり。實にや地を掘れば水に遭ひ、壁を穿てば光に遭ひ、人の心の奥に入れば、必ずや如來に逢ひ奉ると云ひけん如く、吾

人は茲に不斷不盡永劫に輝ける如來の光明に接しぬ。

一。「其數頃無源の塘水たらんよりは、若かず數尺有源の井水、生意窮らざるものとならんには」如來の御胸に育まるゝ靈の子は、よしや三千の宮女と、百萬の富と、萬卷の書の主たらずとは云へ、至深至奥の靈覺の胸より湧き出る法水長へに吾人の心靈を濕して、生々活達の精氣身心に溢る。渴けるもの惱めるものは、來つて吾等の胸より、吾等のものにして吾等のものならぬ法水を、掬すべく味ふべし浴すべけれ。かの沈滯して底淺き塘水は所謂物界の成功者にあらずや、吾人は寧ろ之を感れむ。

一。思へ、百日の旱天は能く無源の塘水を痕なく蒸發せしむるにあらずや、されど有源の井水にはかゝる憂なし。前者は自力迷執の人にあらずや、



すや、世俗の所謂偉人にあらずや。彼等の力は有限なり微弱なり、开はいかにしても地上のものたり、之に反して後者は如來の子にあらずや、他力念佛の行者にあらずや、富貴も奪ふべからず威武も屈するに足らず、彼等の力は無限に湧き來りて滾々盡きせざるもの、其せらぎに天上の響あり。

一。「未だ知つて而して行はざるはあらず、知つて而して行はざるは只是れ未だ知らず」。哲人陽明を想ふや何人も先づ知行合一を連想す、願ふるに是れや單なる理論にあらずして實驗實踐の上にある。而して我如來廻向の信行も、不離にして一體なり、此二者全く合一せられたるものとして吾人の心靈にうく。信するは力なり、力は行ひなり、吾人の信念は單なる空想にあらずして如來の威神力の降つて我胸に宿れるなり。され

ば是れ偉大なる力なり、吾人既に力を有す、此の發動は如來の大道にあらずや。見よ知行合一は他力の信行に來つて、初めて眞意義を發揮するものにあらずや。本書又曰く「知は行の始、行は智の成、聖學一箇の功夫、知行分つて兩事と作すべからず」と。然り信は行の根底、行は信の發動、等しく是れ一團として如來の賦與し玉ふ所、分つて兩事と作すべからざる、素より其所なり。

一。「道の精粗を問ふ、先生曰く、道に精粗なし人の見る所に精粗あり、這の一間房の如し。人初めて進み來るや、只一箇大規模の此の如きを見るのみ、處る事久しうして便ち柱壁の類、一一看得る事明白なり。再び久しうして柱上此の文藻あるが如く、細々看出し來る。然るに只是れ一間の房」。



行 言 の 人 偉

一。如來の光明遍く十方を照して障碍する所なし、機に随つて吾人を導き給ふも、唯やるせなき大慈悲心たるに於ては全く同一にして、厚薄、淺深、精粗、寬嚴の差別なきも行者機受の上に於ては自ら信仰的天地の風光を異にするものあり。吾人初めて信仰の門に入るや、其風光の雄麗にして、嘗て一度も接せざりし一種標渺たる新天地の大規模に驚き、如來の慈光のしみくくと我身に感せられ、吾等は此時全く慈心の大海に漂ふて、つさせぬ法味樂に酔ふの思ひ胸に満ち、心身慶忻の情に溢るれば、居る事ごとく久しうすれば、如來の慈光智に我心靈の上に働き給ふのみならず、飛花落葉の上、水村山廓のほどり、家庭の上、國家社會の上、なべての上に光明の溢れくつて、我等は日に他方信念の細々を味ひゆくを覺ゆ。されど信念其物の實質は、依然として他方向上の信念

行 言 の 人 偉

にして、初め入りたる房の、後にして眺めらるゝと同一の一間の房たるが如きのみ。

一。あはれ面白の信念の風光や、時には水を渡り又水を渡り、花を觀又花を觀、春風そよぐ江上の路をあかぬ眺めに心も爽やかに身も輕う、御親の御名に勇み立ちて向上の大道に上る。無爲涅槃界の淨刹を期するの心と、現在安住の思ひと、此の矛盾せる如き二大思想は、常に吾人が報謝の不行に於ける双輪となつて、利他の大白牛車徐ろに塵の世を樓りゆく。

一。「目に體なし、萬物の色を以て體となす。耳に體なし、萬物の聲を以て體となす。鼻に體なし、萬物の臭を以て體となす。口に體なし、萬物の味を以て體となす。心に體なし、天地萬物感應の是非を以て體となす。」



す。

一。試みに上文「萬物」の二字を以て「如來」の二字に易へよ。お、如何に絶對他力の信仰状態を、明かに詮顯せるぞや。吾人は中心をあげて如來の大心海に置きぬ、聞信一念のきざみ、我心身の一切は如來の興へ給ふ恩恵を以て對象となし、之を仰ぎ之に浴して生活す、否な我心身は如來を以て體となす。見よ妄念荒れ狂ふ心の奥には、靈光儼とじていますにあらずや。而して賤しき我身は、眞の意義に於て、如來より借り奉れる聖なる法器なり。かくて吾人は、根底に於て如來と一致し融合し體達す、あゝかくて何をか求めんとする。

一。吾人が本書に於て靈感に接するもの只夫れかくの如し、是れ或は世の人の陽明を解するものと大いなる徑庭あらむ。されど信仰の見地より本書を見る時は、彼も亦如來か我世に下し玉へる聖なる調の一節を奏でたるものに外ならず。然り本書一部皆な是れ靈の響きなり。(習學)

一。さる氣象爽森の夜、太空の鵬は我に降つて「靈丹一粒」を授けた。有體に云へば我は全く今日迄その靈丹を知らなかつた、茲に端なく太空の鵬：敢て我が同人をしか呼ぶ：によつて、之を受くるの機を得た、即ち直に之れを點じ見れば、我が頑陋鐵の如き胸は、忽ち徹か乍らも、その奥底に紫摩金色の光を認むる様な感じかする。かゝる時誰あつて霜の朝日に融くるやうな心持ちのせぬものがあらう。我は之に因りて深く同人に感謝せざるを得ない、従て今まで『傳習錄』が斯くも尊いことを知らざりし我が愚さの、餘りに大なるに呆然たらざるを得ない次第である。

一。世に聖哲と呼はるゝ人も未だ棺蓋に掩れざるに方りて、人は其の



妄を譏り、其の諂を罵り或は嫉むで人を沮み、甚しきは、之を殺さむとするに事あらざる、かやうな例は数え來れば實に夥しい。然れども此等迫害は、聖哲を軒輊するに足らぬ、彼は却てその間に出沒して、宛も「亡子を道路に求むるが如く」に、汲々遑々として天下の「自私自利するの蔽」を去り、また「媿妬勝忿の習」を一洗せむと勉めて一身の利害をかへりみるの暇がない。我は之を、釋尊に見、イエスに見、孔子に見、日蓮に見、親鸞に見、其の他あらゆる偉聖の上に拜し得た、王陽明亦確かに偉聖中の偉聖である。陽明云く「天下の人心は皆吾の心なり、天下の人猶狂を病むものあり、吾安ぞ得て狂を病むに非らざらむや、猶心を喪ふものあり、吾安ぞ得て心を喪ふに非らざらむや」と。

一。況や、如來は遠劫の昔から悠久の後に至るまで、一念一刹那も衆

生のために心を安んじ給まはざるところの、悲智圓滿の大靈體にましますではないか。

一。我れ獨り曾て近郊を散歩せし時、路上に大石の横たはれるを見て、「咄、誰がかゝる悪戯をしたのが、往く人も歸る人も、皆此處で迷惑するだろう」と思つた。今『傳習錄』に「道は坦として道路の如し、世儒往々に自ら荒塞を加へ、身を終るまで荆棘の場に陥りて而も悔いず」と云つてあるが、實にこれだ。自ら荒塞するものは、たゞ世儒ばかりではない、今から思へば我も亦自ら荒塞するもの一人であつたのだ、本來康莊の大道は何等の苦慮と何等の疲勞とを感せず、樂々と歩み能ふものなるを、我も人も、共に浮世の道具を以て、之をこぼち、之を損ふて、遂には傍徑に迷ひ入りて荆棘に苦むのである。「之を論すること愈々精にし



て、之を去ると愈々遠し」とはこゝらのことだ。見よ、堯舜の教は簡單ではなかつたか、イエスの云ふ所は平易ではなかつたか。されど再び見よ、今の堯舜を云ふものを、今のイエスを語るものを。佛教者亦之を三思せよ、その始め、今と相距たると僅か二千年か三千年、甚しいかはりやうをして居ぬだらうか、實に恐るべきは自力の思念である。

一。然れども、如來他力易行の一道は、至簡で、至明で、至精で、至微で、至妙で、しかも「徹上徹下」自力も我慢も遂に染動し得ざる白道大路である。

一。教を受けむとするものは、去て里の小川に寒空を忍び、手を赤くして大根を洗ひつゝある童女に問へ、而してその歌に耳傾けよ、彼の歌ふ所、歌はツマラぬ、節はマツイ、然しその邪思なきに至つては、到底

玉堂に琵琶を抱ける伶人の及ぶ所でない、古の賢人は「愚夫愚婦と同じき、是を同徳と云ひ、愚夫愚婦と異なる的、是を異端といふ」と教へた。今や上下左右皆これ所謂賢才の士と稱す。我等偶々信を語れば彼等は直に愚夫と嘲り、教を云へば直に愚婦と貶としむ、これ果して眞の賢者か、非歟。

一。如來廻向の信心は愚痴にかへりて念佛する、極めて精一簡易の法で、而もこれ「一丁百當的の功夫」である。

一。山堂に入つて獨り静寂を學ばむとするは、我が亂心の龜動に苦む、さりとして的もなく捨てやりにせむとするは、我が衷心の不安を如何ともすべからず、實に確固たる地盤に立たざる時は、その静たらむとする、その動たらむとするを問はず、共にこれ天下を殺し、自己を害



ふものである。「薬によりて病を發す」とは全くこれ。もし「能く事に隨ひ物に隨ひて此心の天理を精察し、以て其の本然の良知を致さば、則ち愚と雖必ず明に、柔と雖必ず強く」たとひ多少の邪思起り來るも、「這裏一たび覺れば都て自ら消融す」るとは事實である、於茲、知は行によりて生じ、行は知によりて生ずと云ふとの味が、實によく分る。

一。和・諶に曰く「信心の智慧に入りてこそ、佛恩報ずる身とはなれ」  
 報佛恩とは吾人が信後の一切の行業のことである。

一。總じて熊を獵する者は、偶々人を見違へて射止めることがある、人を愛する人は、偶々やれ人形を見ても打ち萎はれずには居れぬ。同一の節でも、見る人によつて其用法を異にすることを忘れてはならない。(註義)

### 八、論語

小引

「論語」は孔子の言行録なり。孔子は周の靈王之二十一年我松崎帝の三十一年に魯の昌平郷に生る。道を特する厚く、世を禹湯の古へに復へさんとし、齊に歸き、衛に往き宋に遊び陳に説きて席暖まらず。併も多く用ひられず、六十八歳魯に還る。魯終に亦孔子を用ふる能はず。孔子亦仕官を求めず、爾後六年靜に書を叙て禮記を傳し、詩を刪り樂を正し、易を序へ春秋を造る。又寧ろに門弟に訓へて仁義の大道を布く。かくて大聖七十三にして光陰昇程の聖業さなれり。「論語」は實に大聖の生きたる面貌なり。篇を分つ二十、門弟曾參、有若の二人の手によりて成ると稱す。

一。其人を導くや器に隨て諄々懇切を極め、其不仁を懲らすや、激越の詞、森嚴の辭、偉人も君王も眼中になく、能く修身道德の蘊奥を極むるものを「論語」一篇となす。

一。「論語」は活ける孔子なり。其弟子の言を云ふも、皆な弟子を透し



ての孔子の言ならずや。吾人は此書によりて孔子を知り、孔子によりて人道を知り、人道によりて宗教の門に入るを得たり。

一。渾然玉の如き人格、道を信する事篤くして適切に日常生活の要義を説き、父母に對し、君王に對し、妻子朋友兄弟に對する、人間の行動を指導して、至らざるなき孔子の教訓に接して、吾人は始めて人の道に接しぬ。されど道を知るは、道を行はんが爲めなり。見惑は断じ易きも、修惑は容易に断つべからず。道を行ふ恰も嬰兒の如くなる吾人は、薔薇の花を折らんとして其柔き手を傷むる如く、徒らに善美の現想を高く望んで、吾身の達し難きを嘆じ、遂にはか弱き胸を傷むるに及びぬ。かくて吾人は道知らざりし以前より、多くの苦悶を惹起するに至りぬ。

一。かくの如くにして、吾人はいかにせば『論語』に示す如き道義を實

行し得るやとふ問題に逢着したりき。即ち是れ人の道を行ふに先ちて、之を行ふべき或る根底を求むるものにあらずや。然り、空中に樓閣を築くべからず。根底なき力なき吾人が、直ちに至大至高なる道徳を、遺憾なく實行せんとするは、宛然ら空中の樓閣を欲するものに似たらずや。

一。人生問題の解決は、其中心を把住するにあり。倫理上に於ける自己の無力と罪惡の自覺は、終に吾人を驅つて、人生の中心たる宗教の大地に直進せしめぬ。かくて吾人は絶對他力の妙用に乗托して、宇宙の至靈に接觸するに至りぬ。

一。此見地に立つて『論語』を見る。嗚呼何等の莊嚴ぞ。一章一句皆な自覺の根底より流れ來りて波瀾萬狀、恰も絢爛たる綿繡の經線に貫かるゝが如く、言々人の肺腑を衝き、痛切剴切の妙を極むる、一篇の根底に



横つて千古の異彩を喚發する一大精神を見る。かくの如くにして吾人は『論語』の精髓に接し、孔子の全身を見、其指導の偉大なるに欽仰せずんばあらず。

一。見よ、孔子は尋常一様の道學先生にあらず、其道を信するの篤き金剛の如く、常に天と心を一にして人世に處したるを。嘗て桓魋の爲めに迫害せらるゝや、揚言して曰く、「天、徳を我に致す、桓魋夫れ我を如何せん」と。水涸れて石出で、歳寒うして松柏の後れて凋むを見る。其宇宙の大靈と融化したる熒々たる大精神、時に迸つて激越の調となるもの、此一語に於て明かに見るべきにあらずや。

一。如斯熱烈なる言を發する彼の日常生活に於て悠々迫らざる襟度を見ずや。「一簞の食、一瓢の飲、陋巷にあり、人は其憂ひに堪へず、回也

其樂を改めず、賢なる哉回也」と嘆賞したる彼は、亦「疏食を食ひ、水を飲み、脰を曲げて之を枕す、樂其中にあり。不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」と云ふ。人を賞むるは畢竟己を賞むるにあり。彼が顔回を賞むるの語は同時に彼自身を賞むるの語ならんとは。

一。「朝に道を聞いて夕に死するも可なり」「君子に三つの畏れあり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る」「知らざるを知らずとせよ、是れ知れるなり」「君子は坦々蕩々たり、小人は長へに戚々たり」。

一。龍天上にあるや雲間屢々龍鱗を現はすとかや。彼が多く其機に應じて平身なる修身道德の要義を説ける間、其深奥にして至高なる靈的自覺の聲は時々謙者の胸琴に響く。而して其の響の如き多くの平身なる教訓も、龍なる靈的自覺の根底を有すればこそ、變幻出没の妙を極むるな



れ。あゝ偉なる哉「論語」一篇。

一。此書や天上の星の下りて、地上の花と咲きたるものなり。人として其花の芳香に酔ひ、美に打るゝあらば、仰いて天上の星を知らざるべからず。吾人の孔子觀亦然り。唯世人が「論語」を以て、孔子を以て、實に人倫道德を説きしに止るものと速断するを慙れむのみ。(習學)

一。宗教は攝受門也、其味甘酒の如し。道德は拆伏門也、其味苦藥の如し。毎に甘酒屋の看板を見る者、時々苦藥の機能を聞くも善からずや。

一。「論語」二十篇は、眞實に絶好の道義書也。而して此書は二千年來、平民聖書として、我國民に取扱はれたる書也。爾るに、現代の青年は、華麗なる歐米式の装釘に眩惑せらるゝか故か、今や貴重なる聖典を

忘れんとす。かくて、余は此書の流行を獅子吼せざるへからざる也。

一、世に宗教と道德との關係を討議する者あり。されど、此等は餘りに呑氣なる業ならずや、世に信仰者と君子の人格を批判する者あり、されど、此等は餘りに無作法なる仕打ならずや。要之するに、道德の實行は奨励すべきこと也、君子の人格は敬慕すべき者也、かくて、余は永久に此書を読まざるべからざる也。

一。「論語」は倫理的生活を教へたる書也、倫理的生活とは、大道による生活也。曰く、「忠信を主とせよ」、曰く、「孝は徳の本なり」、曰く、「嗚呼夫れ恕なる哉、己れの欲せざる所人に施す勿れ」、是れ此書德育の大本也、一貫の大道也。

一。「論語」の主張は平凡着實也。かの忠孝と云ひ、忠恕と云ひ、五倫



行 言 の 人 傳

と云ふ、皆平凡着實の文字なり。架空なる思辨と、贅疣なる言論は、絶  
 待的禁物也。曰く、「君子は言に訥にして、行に敏からんと欲する也」、曰  
 く、「子貢君子を問ふ、子曰、先づ其言を行ふて、後之に従ふ」と。  
 一。「再求曰、子之道を説ばざるに非ず、力足らざる也。子曰、力足ら  
 ざる者は、中道にて廢す、今女壽す」と。此物語は予に於て最新の教訓  
 也。嗟、予輩僅に程子の所謂論語を読み終り一兩句を得て喜ふの類乎。  
 一。力足らざる者とは、道に進まんと欲して、能はざる者也。壽する  
 者とは、能く道に進み得て而かも欲せざる者也。借問す、我等、夫れそ  
 の孰れぞや、是れ修養者の斷じて熟考すべき問題也。  
 一。余は實際と思辨の飯納法によりて、自己進道力の不足を自覺した  
 る也。即ち道德の開展によりて、絶對的安穩を得べからざるを自信した

行 言 の 人 傳

る也。見よ、自己は善善と罪惡とに満てるに非ずや、自己は智目行足に  
 不具なるに非ずや。  
 一。されど又、自己は事實上、些少進道力を有しながら、再求が藝に  
 局して大道を壽したることく、大道を壽しつつある也。見よ、昨年の自  
 己と今年の自己と、道義の進化夫れ何ぞや、零也。今現に自己は幾多の  
 方法を設けて進道しつつあるや極めてあやし。誠は慚愧の至也。  
 一。程子嗟歎して曰く、「今人書を讀むことを會せず、論語を讀むが如  
 き、未だ讀まざる時は是れ此等の人、讀み了る後又只是れ此等の人、便  
 ち是れ會て讀まざる也」と、格なる意味に於て、論語を讀む至難なる  
 哉。(廣度)

一。「論語」二十篇。一たび之を讀みしとき、我に悲憤の叫ありき。二



たび之を察せしとき、我に恐怖の聲ありき。三たび之を思ひしとき、我に歡喜の涙ありき。四たび之を仰ぎしとき、我に精進の思ありき。

一。百合に蜜あり、甘きこと榮華の酒も如かず人渴して之に走るとき、危し、そこに蝮蛇の眼は輝けり。萩に露あり、清きこと曉の星に似たり、蝶喜びて之に飛ぶとき、おはれ、そこに毒蜂の針は光れり。濁れる世ならずや。罪の風暴れにあれて人の草皆之にひしがる、道それ何處にか存す。仰ぎ見る二千百有餘年の昔、深く察す末代濁亂の今、かくて我に悲憤の叫ありき。

一。退て省る、そも我は如何と。「惠を懷ふ」て「刑を懷」はず、「利に喻り」て「義に喻」らず、不賢を見ては之に同じ、賢を見ては之を憎む、至愚、至魯、至辟、至嗟、げに君に對して忠なく、父に對して親なく、長

に對して序なく、友に對して信なし。若しそれ『論語』が教ゆる如く、進みて我徳を養はむか、如何にせむ、迷執は迷執を生み、妄情は妄情を來すを、而も揚言すらく、涓濁の世を如何かすると。善惡の二總じて存知せざる我にして濟民とは何ぞや、經國とは何ぞや。「朽ちたる木は雕るへからず」。ア、天下を欺きたる我、自己を欺きたる我、この我、至惡のわれは如何にすべきぞ。森嚴なる聖賢の言に對し、慄然として恐怖の冷汗は背を濕し來りぬ。

一。忽焉として天外飛鴻あり、告げて曰く、如來まします、光無碍に、壽無量に、と。感謝す、暗黒は光明の來る所以なりき。われ我を所理せむとの痛苦は、即ち如來招喚の御囑にてありき。坦々たるかな如來の大道、炳爛の光明に浴して、野人ゆき、學者歩み、而して我も這ふ。



憊々たるかな大悲の願船、清涼の微風に吹かれて、囚人のり、小兒眠り、而して我もすがる。罪とや、願力無窮にましますせり、障とや、佛智無邊にましますせり。「天の未だ文を喪さずむば、匡人それ子を如何」。如來支證の御名、現にまします、亦何をか恐れむ。いま我、わが總てを持して如來の御前に投する時、胸は滾々として歡喜につきます。

一。善しと思ふ心も、惡しと思ふ心も、浮草の風に漂ふ我等には畢竟繫縛なり、桎梏なり、鐵の輓なり。愧つべし、我はこれを知らずして世にうごめさぬ。さればこそ『論語』も亦我等を縛る鐵鎖なりしよ。さるに今、如來は根底より我を破壊して、興ふるに御名を以てしたまふ。此の恩、この徳、我に唯感謝あるのみ。利他とは何、我知らず。救済とは何、我知らず。我は唯謝恩にもがなと、御名の地盤に立ちて歩々進まむのみ。

み。精進を以て「及ばざるが如くして、猶之を失はむことを」恐るゝのみ。

一。茲に於て亦『論語』を拜す。『論語』はこれ如來の道を説ける書なりけり。「吾道は一以て之を貫く」とは、心靈に歸仰あるもの、弊ならずや。富貴と貧賤と生死と壽夭とを度外視し、「蔬食を食ひ、水を飲み、脛を曲げて之を枕となし」。怡々として「意なく、必なく、困なく、我なし」とは慈光に浴しつゝあるもの、尊しとする所ならずや。而して我等が特に最も本書に負ふものは、如來が本書を透して、我等に精進の教を垂れたまふことにあり。

一。逆如上人教へたまへり「萬事について善きことを思ひ付けるは御恩なり、惡事だに思ひすてたるは御恩なり、捨つるも取るも、何れも何



れも御恩なり」と。孔子述べたまへり、「予のすまじき所のものあらば、  
 天之を厭てむ、天之をすてむ」と。我等元より、中庸なく、克己なく、  
 仁義なく、禮節なし。さるにても、我等幾庶はくば聖教の指導に乗託し  
 て古聖の跡を逐はむかな。

一。大靈の妙教を弾づる無弦の琴は宇宙にみたり、無音の鐸は天地に  
 動けり。さはれ我等愚昧、聲なきものは聞くべからず。「論語」一篇、こ  
 れ簫々流れ出づる靈の金糸ならずや。げにこれ韃々轟き渡る教の木鐸な  
 らずや。(祐義)

### 九、『法華經』

小引

法華經は釋尊が靈山八年の説法を結集したるものなりといふ。その支那に傳譯されしは、  
 遠く吳の正無畏に始まり、六譯ありて三譯存す。されど羅什譯、最も世に稱せらる。卷を分  
 つ八、品を分つ廿八、序品に始まり、勸發品に終る。法華經の釋義に至りては、天親の法華  
 論、天台の玄義、文句、日蓮の註法華等學て盡すべからず。又以て如何に法華經が、多くの  
 人に讀まれたるかを證するに足らん。

一。釋尊將に此經を説かんとして入定し玉ふや「眉間白毫の大光普く  
 照し、曼陀羅、曼殊沙華を雨らして栴檀の香風衆の心を悅可せしめ……  
 眉間の光明東方萬八千の土を照らして皆な金色の如し、阿鼻獄より上有  
 頂天に至る迄の諸の世界中の六道の衆生の生死の所趣、善惡の業緣、受  
 報如醜此に於て悉く見はれぬ」。



一。大乘教は自覺の根底に立つて、其不可思議の妙境を説明せしに外ならず。されば常識を以て之を見る時は、吾人は其誇大空漠にして、茫々捕捉し難きに驚かすんばあらず。即ち我法華經の如きも、此の見地に立つ時は、其所説會に空漠なる詩的想像を符するに、華麗莊嚴なる文字を以てせしに過ぎざるか如しと雖も、此間偉大なる深義の存する所なくんばあらず。

一。信仰の天地は廣大なり、其靈境は凡夫の思議すべき所にあらず。感むべき衆生は、「焔熾にして棟梁椽柱の爆響震裂」する、「火宅」に嬉戯して共に不急の事を争ひ、清涼の天地を知らず。適、人あつて信仰の大地を説くも、唯夫れ空想なり、詩的産物なりとして省みず。吁法華經は「火宅」の「諸子」を靈界に導かんとする靈父の教誡に外ならず。

一。自覺の境にある人より之を見れば、常人の以て大空想とする法華經の所説も猶ほ未だ盡さるる所あるやも知れず。然り人間の感情すら、吾等の文字は、能く表はし得ざるものあるにあらずや。況んや絶對の妙境をや。されば、もし之を強いて發表せんには、勢ひ常人の所謂大空想を以てせざるを得ず、法華經を讀み來りて其誇大と、靈怪と、豪放とに驚くものは、未だ共に一乗教の眞意を談するに足らざるなり。

一。一切衆生 皆是我子 深著世樂 無有慧心  
 三界無安 猶如火宅 衆苦充滿 甚可怖畏  
 常有生老 病死愛患 如是等火 熾盛不息  
 如來已離 三界火宅 寂然閑居 安處林野  
 今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是我子



是れ豈に觀無量壽經の、所謂「佛心者大慈悲、是以無緣慈攝諸衆生」と相待ち、共に永劫黑暗の天にかゝつて、人の子を導く白虹の如き大文字にあらずや。

一。所謂三界の迷ひに沈める愛子を、其自覺の境に導かんとして、平易なる譬喩をとき、句々人情の機微を穿ちて、漸次に靈界に悟入せしむるの巧妙なる、吾人は譬喩品と信解品とを讀んで、やるせなき大悲の父か、諄々として吾等を教食し玉ふ風采に接せずんばあらず。

一。法師品に至りては吾人をして「如來の使、如來の所遣として如來の事を行ひ」如來の室に入り、如來の衣を著け、而も如來の座に坐して衆に處して畏るゝ所なく、廣く爲めに分別し説き「たる、歴史上の人格を想起せしむるともに、「柔和の忍辱を衣とし、諸法の空を座となす」

を救へ玉ふ如來の大悲に感泣せずんばあらず。我等亦不東ながら如來の威神力に乗托し、「如來の御代官」として、我等を靈の天地に導きませる宗祖の御跡を踏まん哉。

一。壽量品に至つて、吾人は本門の釋尊即ち「塵點久遠劫よりも久しき佛」たる如來に接しぬ。嗚呼嬉れしや、如來は久遠の父にして、我等は永劫以來如來の愛子なりき。佛は親様なれば必ずよきやうにして下さる。の確信を、得しめ玉へる如來の大悲大恩、あはれ賤しき吾等は、何を以てか酬ひんとする。

一。於阿僧祇劫 常在靈鷲山 及餘諸住處 衆生見劫盡

大火所燒時 我此土安穩 天人常充滿 園林諸堂開

種々寶莊嚴 寶樹多花果 衆生所遊樂 諸天擊天鼓



常作<sub>レ</sub>衆伎樂<sub>一</sub> 雨<sub>ニ</sub>曼陀羅華<sub>一</sub> 散<sub>ニ</sub>佛及大衆<sub>一</sub>

是れや實に絶對的他力の信仰の大地。おゝ何等莊嚴ぞ、遊戯園林の樂極みなくして長へに如來の榮光あり。あゝ我等はいかなればかくも幸の多きや。

一。吾人は普門品の所説を以て、物質的に解釋するを欲せず。よしや時には、事實上觀音の利益しかく物質的たる事ありとするも、开は根本的のものにあらずて枝葉に屬す。何んとなれば如來は吾人の肉を救濟するよりも、永劫に靈を救濟するを目的とし玉へばなり。

一。如來の威神力、靈界の光景、是を説明せんには先づ萬人の了解し易き物質界に寄顯せざるべからず。然るに世人徒らに其枝葉に起りて如來の眞意を忘るゝが故に、遂には法華經を以て一面迷信の本場とせしむ

るに至ると雖も、是れ畢竟讀者の罪にして法華經の關する所にあらず、否な適以て法華經の偉大なる價值を反證するに外ならざるなり。

一。法華經は遠く釋尊自覺の胸奥より流出せる唯一無二の大潮流にして、沿く東亞の心靈界を流れて天台大師を生み、傳教、日蓮の先覺を生み、湖流長へに流れ、て絶對他力の大道益遠く流傳せらる。吁偉なる哉、法華經一部二十八品。(習學)

一。天台を支那に生み、日蓮を日本に生みたる、妙法蓮華經一部八軸。釋尊が靈山會上の長廣舌、二十八品の大説法は、今も永へに大千に響きつゝあるなり。

一。法華經前半十四品、迹門段の教示によりて、我等は限りなき如來の恩寵に泣かざるを得ず。後半十四品大門段の顯示を讀むに及んで、我



等は如來の靈威を仰いで止まず。

「見よ、方便の一品のいかに濫きかを。更に見よ、壽量の一品のいかに崇高なるかを。」

一。「法華經は實語の中の實語なり、眞實の中の眞實なり。」(日蓮遺文録)、慈父は幾度か、子の迷夢を破らんとして能はざりき。親の慈足らざるに非ず、子の眠厚ければなり。然して、今法華經に來り、眠漸く醒め、眞實の教漸く耳に入らんとす。親の喜び知るべきなり。唯一大事因縁の故を以て此世に出現す」といひ、「我昔の所願、今は已に満足す」との方便品の教示は、教父の熱き慈愛の涓滴に非ずや。

一。佛乘の眞門開かる、誰か入れられざる。智慧第一の舍利弗先づ入りて大天地の聚となる。迦葉、目蓮、迦旃延、須菩提の四大弟子次で入

り、五百の弟子又其數に漏れず。我等亦其蹤を透はん哉。

一。譬喩品に於ける三車一車の譬と、信解品に遺されたる長者窮子の喩とは、信仰の實驗的告白に非ずや。更に化城喩品の化城寶所の譬喩と、五百弟子品の衣内繫珠の喩とは、他力的信仰の徑路を示せる大文字に非ずや。誰か此懇切丁寧なる法華の大説法を聴て、胸に新なる靈の囁に懺せざるものあらんや。

一。進んで、法華本門段の説法に至りて、大海の廣き慈悲に浴したる我等は、須彌山の如く高く、恒河の如く深き慈悲に喜ばざるを得ず。

一。「久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚を哀みて、釋迦牟尼佛と示してぞ、迦耶城には應現する。嗚呼、我等の迷は永劫の遠き昔よりなりき。我等の夢は塵點劫より始まるものなりき。されど、我等の父は、亦久



遠○實○成○の○佛○な○り○き○。塵○點○劫○來○の○古○佛○に○て○ま○し○ま○し○き○。是○よ○り○こ○の○か○た○、  
我○れ○常○に○此○娑○婆○世○界○に○在○し○て○、説○法○教○化○を○續○け○給○ひ○し○遠○佛○に○て○在○し○き○。  
こ○ゝに○、我○等○は○始○め○て○、如○來○の○み○手○に○頼○り○、闍○を○出○で○、光○の○道○に○進○む○を○  
得○た○る○な○り○。何○の○至○幸○ぞ○や○。

一。常不經菩薩の堅忍と、觀音菩薩の寛恕とは、救ひの力のいかに大なるかを知ると共に、我等の暗黒の歴史が、いかに慘憺たるかに戰慄せずんばあらず。此御經を竊に披見申候へば、明鏡を以て、我等が面を見るが如し。日の出で、色を辨るが如し。」と(日蓮遺文録)。至言なる哉、法華經は正に心鏡の明鏡なり。

一。釋尊常に靈山にありて説法し給ふ。こゝに天台あり、日蓮ありしなり。我等亦大聖の後に蹤きて、今や現に靈山會上の聽衆たるなり。

一。我○法○華○經○は○、他○力○教○の○德○音○な○り○。信○仰○の○靈○響○な○り○。道○に○入○ら○ん○と  
す○る○友○よ○、來○れ○。信○仰○に○憧○憬○る○ゝの○友○よ○、來○れ○。來○り○て○靈○妙○の○教○化○に○浴○  
せ○す○や○。來○り○て○、不○可○思○議○の○琴○絃○を○奏○で○す○や○。(最○思○)



## 十、『和讃』

小引

和讃は親鸞聖人老後の選述にして、即ちこれ佛徳讃嘆の聖歌集なり、壯麗の詞、雄大の調、古今多く其比を見ざる所、而も文字極めて簡易毫も解し難き所なく、殊に漢字に對しては、假名を以て右側に字音を示し、左側に解釋を施し給へり、淨土和讃、高僧和讃、正像末和讃の三帖に分れ、前二帖は聖人七十六歳の時、後一帖は八十五歳の時の作なりといふ。今日の如く此三帖和讃を以て、眞宗の信徒が朝暮の勤行に用ゆるに至りしは、蓮如上人の時に始まれりと云ふ。

一。我れは『和讃』に就て、曾て一度びは次の如く思ひたりき。和讃は最も善く眞宗の教を該羅せるものなり、これを心して學びなば、親鸞聖人の思想は明かに知らるゝなり。されどこれを歌としては、佛前の勤行には兎もあれ、常時にありては、何となく調々のはぬ心地し、殊に尊き文なれば、勿體なくして、平常にはこれを口誦むべからざるものなり

と。

一。されど今や我は何時の間にか、低聲にこの讃文を口誦むの妙を感じ始めたりき。而して其の口誦むや多くの人の歌ふ時の如く、晴れたる景色、麗はしき夕陽に對し、又は氣の切りにふさぎたるとき、心に惱を覺ゆる時等にして、其の度び毎に、これを至上の歌なれと思はざるを得ざるなり。勿論至上の歌なりと云ひたりとて、漢詩西詩もえ讀まず、和歌さへ多くは知らぬ我れなれば、敢て古今東西の大家の詩歌と比較して云ふにはあらず。殊に非音樂的なる聲帶を持ちて生れたる身にして、歌の事云はんも可笑しけれど、唯だ獨り他の詩歌は何所となく一種悲哀の所あるか、然らざれば無暗に元氣を附けし所ある様に感ぜらるゝを、この和讃のみは陽氣もなく陰氣もなくいとま莊嚴に、加へて中心に満てる



感謝と満足とのひびきあるが如く覺えて、常にこれを至上の歌なれと思はざるを得ざるなり。

一。他の聖教に對する如く、この和讃を拜讀するときには、この和讃は我が聖人の信仰より流れ出でたるものなれば、至上の如來と底下の我等とを結合せらるゝ尊き道理、この中に籠れりと思ふて、其の文字を一々に味はんとす。されども、これを口誦むときは、敢て明了に讃文の意味を意識せず、寧ろこの讃文に不可思議の音律ありて、其の音律には諸有ゆる如來の功德融合し、内容の形式と一體になりて、何所よりか我心の奥に、慰藉歡喜のひびきを傳ふるが如く覺ゆるなれ。

一。聞く佛前に於ける勤行の調子は、淨土の音樂を其のまゝ寫せるものなりとか、しからばこの和讃は直ちにこれ淨土の歌にあらざるか。如

來性起の音聲は微妙圓音にして、重々無盡、十方法界に徹到せりと云へば、聞くべき根機によりては、夜來八萬四千の偈も聽くべく、蛙聲鳥吟にも證悟の分あるべし。されど耳根未だ熟せざるこの世界の我等にも聞かざるべき淨土の音樂は、唯だこの和讃あるのみにあらざるか。而してこの和讃の世に存するは、即ち、我が聖人が至心信樂欲生して心を淨土に遊ばしめ、佛の國の音樂を心絃に感じ玉ひてそをそのまゝ歌ひ玉ひ、以て吾等にも聞かしめ玉ふにあらすや。

一。げにや恭敬の心を以てこの讃文を拜誦せば、不知不識、我情も慈悲に融け如來の徳を身に受けて、類なき慰藉歡喜をも得らるるなれ。かくて「或は佛の聲を聞き、或は法の聲を聞き、或は僧の聲を聞き、或は寂靜の聲、空無我の聲、大慈悲の聲、波羅密の聲、或は十力無畏不共法



の聲、諸通慧の聲、無所作の聲、不起滅の聲、無生忍の聲、乃至甘露灌頂衆妙法の聲、是くの如き等の聲、其の所聞に稱ふて、歡喜すること無量なり」と云へる、深妙の旨趣は、一々適切にこの和讃拜誦の間に味ははるゝを覺ゆるなれ。(大樂)

一。赫々として六合の間を破る太陽の光も、之に慣れては人常に其威力を忘れんとす。吾等朝夕宗祖の和讃を拜誦する時、また此感なき能はず。誠に愧つべきは、吾等不敬虔の心なる哉。

一。一代佛典の精髓、三國聖賢の信仰、宗祖聖人の信念に入りて融し、凝りて一部の聖歌となるもの、是宗祖の和讃にあらずや。佛陀の靈覺聖賢の信念、純化され圓熟せられ、洋々溢れて一編の讚咏となるもの、是實に和讃にあらずや。他の聖教に比して、内容の豊富なる、韻

調の壯麗雄大なる、吾人之を拜誦するとき、切々として心絃爲めに共鳴し、大慈父の榮光我上に降れるを覺え、感謝の念禁する能はざるものあり。

一。「如來の作願のたづぬれば、苦惱の有情をすてずして、廻向を主とし給ひて、大慈心をば成就せり」。「願力無窮にましますば、罪業深重も重からず、佛智無邊にましますば、散亂放逸もすてられず」。人生の如何を顧みず曾て苦惱を味はざる人は如來の大悲心を解せざるべし。罪業を覺らず。散亂を感せざるの徒、いかで無窮の願力、無邊の佛智を感得せんや。まことに大悲佛智は吾等が安住すべき根底にして、又希望の生ずる源泉にあらずや。

一。「慈光はるかにかむらしめ、ひかりのいたる所には、法喜を得ぞぞ



のべ給ふ、大安慰を歸命せよ。慈光は法喜の进出する源にして、法喜は安慰の生ずる所以なり。慈光を離れて人は如何にして慰安すべきか、まことに慈光、法喜は人生に意義ある所以にあらずや。

一。嗚呼近き樂園のあるを忘れて徒らに之を遠きに求めたりし我等は返すくも誤れるかな。今や一度靈覺にうながされて、眞摯に和讃を拜誦すれば、無限の靈感滾々として湧き、清新の意義盡きざるを覺ゆ。

(現慶)

一。御親よ、今爾か吾れに降し給へる聖典に就いて、敢て云爲せんとする冒瀆の罪を赦し給へ。

一。吾れは懺悔せざるへからず、吾れは襤褸の中より和讃の語を聞き。口未だ乳臭き時より之を誦せり、爾來二十餘年間義務的に聲高く之

を朗讀し、學究的に講堂にて之を研究せり、要するに之か眞生命を抹殺しつゝありしことを。

一。一たび暴風駛雨の人生に迷惑し、狂瀾怒濤の生死海中に沈溺し、前途の一切は暗黒を以て覆はれし時。曾て無味なりし和讃の一言一句は悉く莊嚴なる靈的文字として吾れに現し、寢食尙ほ廢すべし、しかも此聖典は片時も棄つる能はざるに至れり。

一。今にして既往を願はば、其の侮慢の罪、冒瀆の科、轉た慚愧悔恨を禁する能はざるなり。

一。吾れ人生の解決に苦みし時、疑網より救ひ出せしものは、「無明煩惱しけくして、塵數のごとく遍滿す、愛憎違順することは、高峯岳山にことならず」。「濁世の起惡造罪は、暴風駛雨にことならず、諸佛これら



をあはれみて、すゝめて淨土に歸せしめき」の聖訓に非ざりしか。吾が罪惡に歎歎せし煩悶の涙は、「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障おもしろとなげかざれ」。「願力無窮にましませば、罪業深重もおもからず、佛智無邊にましませば、散亂放逸もすてられず」の靈告によりて「超世の悲願きゝしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にすみあそぶ」の破顔微笑と化せしに非ずや。不遜にも如來の實在を疑ふの時一度ひ、「煩惱にまなこさへられて、攝取の光明みざれども、大悲ものうきことなくて、つねにわが身をてらすなり」てふ福音の警柝に接せんか、遂に疑はんと欲するも疑ふ能はざるに至りしに非ずや。

一。此くの如くにして和讃は吾れに復活し、かくの如くにして吾か永より新生命を注入されたりき。

一。吾れは今「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々の善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひ」し如來の矜哀を感謝せざるを得ざるなり。(幽玄)

一。予は忌憚なく自白する、予は種々の經典聖教よりも御和讃に於て多大の靈感に接しつゝある者である。人の經を調子よく點綴せるを聞くのは有難いものではあるが、自分が讀む時には左程感じない。人は訓讀が非常に有難いと云ふが、余には有難い所と有難くない所とがある。されど和讃に至りては、人の誦せるを聞くのも有難いが、自己が自ら誦する時には尙更有難い感に打たれる、殊に一首として有難くないのは無い。



其の簡古の調と莊重なる文字の裡より、大慈悲の福音が如何にも明かに自分の胸に徹底するのは、予に取りて大なる慰藉である。

一。假名聖教も有難い、御文も實に有難い。されど其の教示の懇ろなる故か文字が管々しい。此等は非常に委曲に吾々を誠示し玉ふけれど、和讃の様に如何にも簡潔に、直ちに肺腑に泌み渡りて、尙云ふ可からざる餘韻の存すると云ふ趣がない。

一。現世利益和讃が結構であると云ふ人がある、懋師和讃が有難いと云ふ人がある。述懐和讃が自警となると喜ぶ人がある。されど予は三帖和讃も述懐和讃も帖外和讃も悉く一首づゝの裡ちに溢るゝが如き靈光を拜するのである。實に和讃は只感じ奉りつゝ感得すべき聖歌である。

一。天地の氣最も清醇なる朝、曙の光が地上に投げられて、萬象が眼

りより醒めたる時、吾等が先づ口にするのは正信偈と和讃とである。吾等日々に一日の最初の淨業として此聖歌を謳つて大靈の慈父を歎美し奉るのである。げに榮光ある一日の初ではないか。

一。和讃の眞味を得奉らんには、講録も要らぬ、科文も要らぬ、此等は畢竟凡夫の書いたものである、却りて此の貴とき聖歌を汚す恐がある。只曉起して虚心淡懷にして靜かに朗詠し奉れば、靈趣は津々として其簡樸なる辭句より湧いて來る。若し夫れ不分明なる字義を知らんには、御左訓は充分に吾等を教え玉ふて餘りがある。

一。去歳の夏、予が檀家に肺を病める十六歳の少女があつた。其臨終の夕、親なる人の佛前に昏時の勤行をなせるに、彼女は幽かなる小さき聲して和讃の助音なしつゝ、眠れるが如く靜かに淨土に歸りた。嗚呼何



と美はしい臨終でないか。  
 一。吾等又此の聖歌を誦して生き、此の聖歌を唱へて働き、此の聖歌を誦ひて死にたいものである。(了海)

明治四十一年五月十五日印刷  
 明治四十一年五月二十日發行

定價五十五錢

郵税六錢



編輯者 無盡燈社

右代表者 和田龍造

發行者 東京市巢鴨町二丁目三五  
 原 子 廣 宣

印刷者 東京市牛込區榎町七番地  
 長 谷 川 清

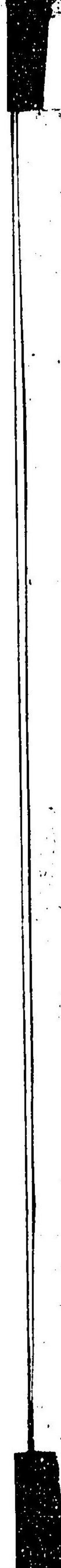
印刷所 東京市牛込區榎町七番地  
 日清印刷株式會社

發行發賣所

東京巢鴨町二ノ三五  
 振替口座三二二三五

無我山房

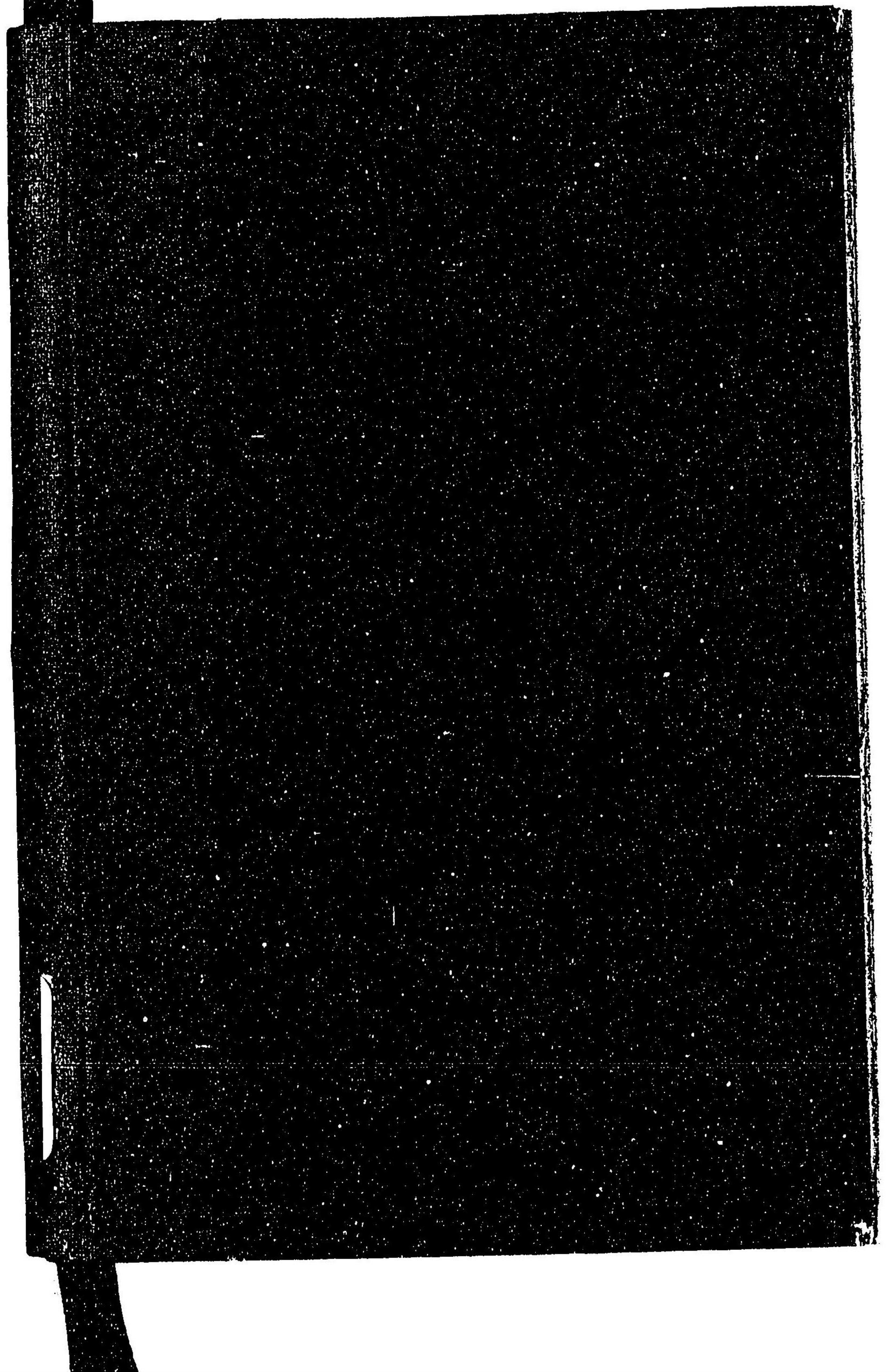






325  
49







325  
49

004093-000-0

325-49

偉人の言行

無尽燈社/編

M41

ACE-0434





